

Typological Classification of Winnowing Machines Inscribed with the Date of Production

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 雅樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004257

紀年銘唐箕の形態分類

近 藤 雅 樹*

Typological Classification of Winnowing Machines Inscribed with the Date of Production

Masaki KONDO

There is a variety of winnowing machines inscribed with the date of production.

Hiroshi Osaka has already reported that they are classified into two groups, one found in the western part of Japan, the other in the eastern. As we have acquired new data and the study has progressed, more detailed classification is required.

In this paper, I attempt classify winnowing machines into five groups by differences in construction of the supports axles. The shape of the supports is as follows;

- 1) The poles which are kept in a vertical position
- 2) The poles which are kept in a vertical position and put on the ground
- 3) The short poles which are kept in a horizontal position
- 4) The short poles which are kept in a vertical position
- 5) The cross poles

For this classification, I have particularly studied winnowing machines which have inscriptions of the *Edo* and *Meiji* eras. It becomes clear that there exist not only regional differences but also distinctive skills and styles of the makers.

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1. 従来の形態分類指標の欠陥 | 4. まとめ |
| 2. 新たな形態分類指標の作成 | 補足 唐箕製造人について |
| 3. 地域的傾向 | 紀年銘唐箕一覧 |

* 国立民族学博物館第1研究部

Key Words : Japan, material culture, agricultural implement, winnowing machine, *Kyo-ya* family

キーワード : 日本, 物質文化, 農具, 唐箕, 京屋

1. 従来 of 形態分類指標の欠陥

墨書その他の銘文によって、製造年あるいは購入年が判明する唐箕、いわゆる紀年銘唐箕の形態を比較したとき、そこに地域的な差異が存在することは明白である。この点に関して、小坂弘志は、江戸時代の年号を有する唐箕20点（表1参照）を比較考察して「東日本風の唐箕」と「西日本風の唐箕」の2種類に大別した【小坂 1980: 125-127】¹⁾。両者をわかつために小坂が提示した指標を要約して示すと、次のとおりである²⁾。

東日本の唐箕の形態に認められる一般的特徴（図1a参照）

- ① 漏斗部は、舟型を呈し、古い時期の唐箕は、起風胴部・選別胴部からなる本体と一体のものに構成されており、分離しない。
- ② 落下量調節装置は、側面からのさしこみ方式を採用している。
- ③ 翼車軸の支持具は、短い束状の部材を縦に取りつけている。
- ④ 穀粒を排出する樋口は、1番口が前面に、2番口が後面に開口している。
- ⑤ 多脚である。

西日本の唐箕の形態に認められる一般的特徴（図1b参照）

- ① 漏斗部は、本体に固定されておらず、分離可能である。

表1 紀年銘唐箕の地方別伝世状況（1）

	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
江戸時代	7	5	1	4			3	20
明治時代	1	4	6	1		1		13
合計	8	9	7	5		1	3	33

小坂が指標設定にあたり用いた資料は江戸時代の20点であるが、参考までに、このとき小坂がリストアップした明治時代の紀年銘唐箕の数量も併記した【小坂 1980: 114-117 資料一覧により作成】。

- 1) 小坂は、唐箕形態の東西差異を指摘するにあたって「東日本風」「西日本風」とあいまいな表現を用いており、明確な型式の規定をおこなわず印象説明にとどまっている。しかし、別の文献では「東日本型」「西日本型」【小坂 1982: 63-65】と記しており、唐箕の形態に2類型を認めていることは明らかである。
- 2) 小坂が唐箕形態の東西差異として示した諸要素を指標とするためには、文献1【小坂 1980: 125-126】、文献2【小坂 1982: 62-63】、文献3【小坂 1986: 186】の記述の異同を整理しなければならない。直接引用せず要約したのはそのためである。なお、文献3では資料数が若干増加している。

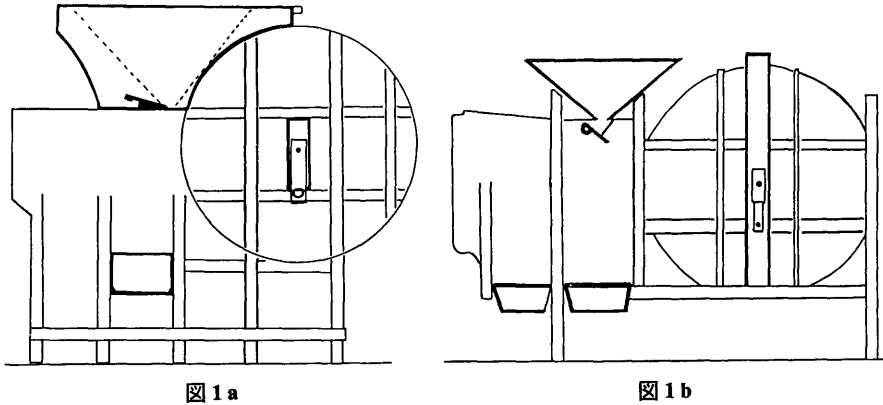


図1 唐箕の形態比較 [小坂 1980: 126-127]

- ② 落下量調節装置は、前面で操作するはね板式または回転式である。
- ③ 翼車軸の支持具は、天地のとおっているものが多い³⁾。
- ④ 樋口は、1番口・2番口ともに前面に開口している。
- ⑤ 4脚である⁴⁾。

これより以後、民具研究者の間では、小坂が提示したこの指標にもとづいて、日本の唐箕の形態を東日本型と西日本型および両者の折衷型の3形式に分類することが一般的となり、この分類に則して研究がすすめられ、製造技術の伝播あるいは製品の流通が考察されてきた。しかし、その後に報告された資料の蓄積とともに一層明白になったのであるが、この分類は、実情に合致したものではなかった。

たとえば、近畿地方に伝世している江戸時代の唐箕に限定してみた場合だけでも、起風胴部の中央に立てた太い柱があるものと、このような柱がなく横木を渡したものと2形態が存在している。前者には、大坂農人橋を拠点としていた京屋一族をはじめとする唐箕製造人たちの系統のほか、大坂周辺にあって京屋の唐箕に準じつつ、その形態に若干の変更を加えたと思われる唐箕を製造していた別の製造人たちの系統があった。また、後者は、大坂から離れた播磨・但馬などの畿内周辺地域に展開していた。小坂による指標③は、翼車軸の支持方法により東西差異を判定しようとしたもの

3)。「天地のとおっているもの」という表現は適さない。小坂自身が図示しているように柱と脚は別材である。

4) 小坂は、注2に掲げた文献1～3では脚の本数を言明していないが、第44回民具研究会で「年号墨書のある民具について―農具を中心として」と題する発表をおこなった(1978年4月15日 日本常民文化研究所)際に、東日本に伝世している唐箕は多脚で本数が一定していないが、西日本に伝世している唐箕は一般に4脚であると指摘した。その発言にもとづいて「西日本では少ない」とする文献1～3の曖昧な記述を修正した。

であるが、横木を渡して翼車軸を支える方法をとる唐箕は、この場合、いずれにも分類することができない。小坂が用いた20点の唐箕のなかには、横木を渡して翼車軸を支える方法をとる2点の唐箕⁵⁾が含まれていたが、小坂は、これらの少数事例を考慮しなかったのである。

形態分類指標の作成の目的は、唐箕の形態差異に着目して製造技術の系統を識別し、技術の伝播と製品の流通状況を明らかにしようとするところにある。したがって、目的にかなり項目の選定が必要であり、この点で、指標③は、翼車軸の支持方法と支持具の形状の諸相を、現存する資料に則して抽出する必要があった。だが、小坂は、東西差異の顕現に拘泥してこれを怠り、本来の目的を看過したといわざるを得ない。また、小坂は、指標①～⑤のうち、いくつの要素をみれば東日本型または西日本型と判定されるのか明らかにしていない。そのため、折衷型の概念があいまいである。小坂の示した指標にもとづく東日本型・西日本型・折衷型の3形式分類には、不確実性が存在する。

唐箕の形態に東西差異が存在することは、小谷方明も認めているが、西日本では「京屋型もしくはそれに類似するもの（略）が近畿，中国，四国に集中している。これに対して東日本では各唐箕にそれぞれ地域的な特色があって、分散的な傾向がみられる」[小谷 1981: 4-5]として、標準形を京屋製唐箕に求め得る西日本に関しては、西日本型の設定を容認している。しかし、東日本に関しては、標準形を見出し難く、東日本型という型式の設定に無理があることを認めている⁶⁾。

唐箕の研究に先鞭をつけた小坂の功績は、高く評価されるべきだが、彼が示した指標は、型式を判定するにあたって問題が多く、これによって唐箕の形態を分類し、その技術系統と流通を考察しようとするのは危険である。各地に現存する唐箕の形態を再度比較検討して新たな指標を提示する必要がある所以である。

2. 新たな形態分類指標の作成

そこで、まず、小坂が提示した構成要素のそれぞれについて、指標とするに足る適性があったか否かを検討して分類の根拠となる指標をあらためて選定し、その後に、

5) 1837年の半唐箕（山形県，置賜民俗資料館所蔵）と1855年の唐箕（京都府立総合資料館所蔵）。

6) 小谷は、西日本に伝世している唐箕の形態が画一化している理由を、「当時、西日本の状態が、商業的な交流が盛んであったため流通したのか、あるいは大阪の支配力が強かったため」ではなかったかと推定している [小谷 1982: 86]。

選定した指標にもとづいて、やや機械的すぎるきらいがないではないが、地方別に紀年銘唐箕の形態を整理してみることにする。なお、このとき対象とする資料は、次に掲げる理由により、原則として江戸時代から明治時代にかけての紀年銘唐箕に限定する。

2-1. 資料の限定

2-1.1. 無銘唐箕の排除

日本における唐箕の形態分類は、前述のとおり確立されておらず、基礎的な分類指標の作成から出発しなければならない。そのためには、製造年代や製造地・使用地などの情報が豊かで、しかも信頼度の高い資料を基礎資料として選択する必要がある。したがって、無銘の唐箕、特に年号の記載がない唐箕を分析のための資料とすることはできない。それらは、分類指標が確立し、製造技術の系統が整理されてのちに、ようやく帰属すべき系統のなかに位置づけることが可能となるものだからである。

2-1.2. 分析対象とする紀年銘唐箕の範囲

所在の判明した江戸時代の唐箕54例（後掲「紀年銘唐箕一覧Ⅰ 江戸時代」参照）をみれば、江戸時代末までに、北海道を除く全国におおむね唐箕が普及していたものと判断できる。ただ、この時代の資料だけでは、東北地方の16点に対して四国地方が2点しかないなど、資料数のばらつきが大きいために全国的な比較をおこなうにあたって正確を期し難いものがある。そこで、ばらつきを補正するために明治時代の資料も採用する。形態の上に前時代からの継続性が認められるからである。この場合、下限の年代設定が問題となるが、ひとまず明治末年の年号を有するものまでを対象とした。その数は71例である（後掲「紀年銘唐箕一覧Ⅱ 明治時代」参照）。これにより、近畿地方の資料数が突出するものの、ほかの地方の資料数のばらつきの程度は、若干緩和される（表2参照）。

表2 紀年銘唐箕の地方別伝世状況(2)

	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
江戸時代	16	9	4	15	4	2	4	54
明治時代	6	5	12	36	4	7	1	71
合計	22	14	16	51	8	9	5	125

表中には、年号銘文はないが製造・取得の年代の記憶が明らかであって、紀年銘資料に準じると判断される若干の資料を含む。

次に、年代の下限を明治末年に設定したことについて、私の見解を明らかにしておく。江戸時代に成立した唐箕の形態は、大正時代になって以後も踏襲されて製造は続けられていく。たとえば「森川屋」という製造人による1925年と1931年の唐箕〔兵庫県立歴史博物館 1991: 19, 16〕や、川崎市内で使用されていた1935年と1937年の唐箕〔小坂 1980: 118-119, 142, 147〕などがある。しかし、このように後年の紀年銘唐箕まで対象とした場合には、次のような問題が生じる。

明治時代もなかば以降になると、さまざまな工夫を加味した改造唐箕が登場しはじめる。特許・実用新案登録の制度が実施されて新発明・改良に拍車がかかり、近代の発想による新しい形態の唐箕が続々と登場してくるのである。『特許明細書』の「第13類 農具」部門に初出する唐箕の特許番号は、第314号（1887年公布）で、これは「唐箕の改良」と題され、1886年に東京府の相原吉之助から出願された。漏斗部下口にもうけた糠芥除去具の軸に翼車軸の回転運動を伝達するためベルトを導入したものである⁷⁾。こうした発明・改良のなかには、多分に非現実的なものもあったであろうが、いくつかは実用化されて流通していった。特に金属製歯車の導入にともなう翼回転の高速化ひいては小型化・軽量化がはかれると、従来とはいじむしく異なった形態の唐箕が出現することとなった。このような近代における改良の結果登場してくる唐箕を近代唐箕と呼ぶことにするならば、近世に成立した唐箕の形態分類指標を設定するために必要な基礎資料のなかに、このような近代唐箕が過剰に混入すると余計な混乱が生じる。下限を明治末年として、それより以後の資料を捨象する理由は、この点にある⁸⁾。

2-2. 構成要素の適性検討

小坂は、分類指標を提示するにあたって、漏斗部・落下量調節装置・翼車軸支持具・樋口・脚の本数という5つの構成要素を選びだした。これらは、いずれも唐箕の機能と形態の印象を決定するうえで重要な構成要素である。しかし、唐箕の形態を分類しようとする場合に、はたして、これほど多くの指標を必要とするであろうか。

分類指標は、複雑なほど間違いを生じやすい。分類作業に要する労力も増加する。だから、本論では、つとめて単純な指標の作成をめざしたい。そこで、これら5つの構成要素について指標としての適性を検討し、じゅうぶんな効果が期待できないものを排除することにする。

7) 大阪府立夕陽丘図書館架蔵資料による。

8) 近代唐箕に対しては、別のアプローチによる分析を試みる必要があろう。

適性判定基準の必須条件は、耐久度である。対象とする資料は、もっとも年代の新しいものでも現在よりおよそ80年以前から使用されてきたものであり、後世の修理や改造を経ても製造当初の形態が容易には変更されにくい要素を選定しなければならないためである。そのうえで、できるだけ単純な分類指標の設定が可能であることがあげられる。

2-2,1. 漏斗部

漏斗部は、本体と一体に構成されていて取りはずせないか、あるいは本体から独立しているかという相違だけでなく、漏斗部の形態そのものにも、三角形・台形などの諸相がある。しかし、本体から分離可能な漏斗部は、製作当初の組みあわせと異なっている場合がある⁹⁾。1850年の「巧工佐七」の銘がある資料は、漏斗部だけが残存している例である。これは、寸法があれば、ほかの唐箕に使用することも可能である。したがって、漏斗部は、指標としての適性を欠く。

2-2,2. 落下量調節装置

落下量調節装置は、必ずしも唐箕本体に作りこまれていない。たとえば1884年頃に入手したとされる「京屋太兵衛」銘の唐箕のように、独立した部品として選別胴部上部にはめ込むように作られたものがある【小谷 1981: 2, および口絵】。これは、選別する穀物の種類によって、たとえば米と麦とで調節装置を取りかえるなど、当初より部品の交換を前提としている。部品として独立しているため、後日に改良された新しい調節装置に置きかえることも可能である。また、さしこみ式の構造であった唐箕の調節版を引きぬいた後にこのような部品を取りつけて、はね板・回転式の構造に変更することも容易である。したがって、これも指標としての適性を欠く。

2-2,3. 翼車軸支持具

落下量調節装置の交換と違って、翼車軸支持具の取りかえは、唐箕の本体を分解するほどの大修理・改造となる。前後面一対の支持具をともし取りかえなければならないようであれば、その唐箕は、おそらくほかの部分にも相当の損傷があり、全面的に大改造されることになるのではないと思われる。1832年の銘がある笠岡市で使用されていた唐箕は、こうした大改造によって形態が変化した一例であるが、この場合は、唐箕そのものを考察対象とすることをあきらめなければならない。

後世に金属製歯車を取りつけたものも多く見かけるが、起風胴部を縮小して小型化

9) 組合せのとり違えは、博物館などが資料として収集するときにもよく発生する。

するような大幅な改造を施されたものでないかぎり、旧状はよく保たれている。歯車を取りつけるために、仮に前面の支持具が取りかえられた場合も、後面の支持具は残り、また、取りはずされた痕跡から旧状の判明する例も多い。翼車軸支持具は、耐久度の点で適性がみたまされしていると認めてよい。

2-2,4. 樋口

樋口は、漏斗部や落下量調節装置と違って本体に固定されているので、交換されるおそれはない。しかし、小坂が言うように単に2口の配列だけが問題なのではなく、選別された穀粒が混じりあうことをどのような形態処理によって防いでいるのか、その構造が判断できるものでなければならない。ところが、本体下部に突出した部分であるためか、樋口の損傷事例は多く、滅失・補修の頻度が高いために製造当初の形態がわからないものも多い。したがって、樋口も指標として適しているとはいえない。

2-2,5. 脚の本数

脚の本数も、修理改造にあたってそれほど容易に変化するものではない。耐久度の点では、翼車軸支持具と同様に適性があると認めてよい。しかも脚の取り付け位置には規則性があり、その本数を正面形態でみるなら2～7の6種類となるので、単純な分類指標の設定という第2条件にもかなうようである。

ただ、問題は、脚の配列にはさまざまなヴァリエーションが認められることである(図2参照)。脚の本数による形態分類には、脚の取り付け位置の順列組みあわせという盲点が存在する。この問題を克服して現実的な指標を求めることは、かなり困難であろうと思われる。

2-3. 分類指標の作成

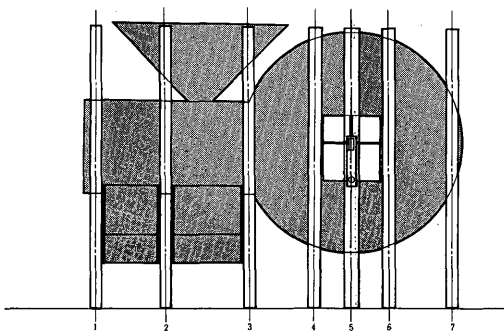


図2 脚の取り付け位置

漏斗部・落下量調節装置には、独立した部品としての互換性がある。樋口は、損傷事例が多く、滅失・補修の頻度が高い。いずれも耐久度の点で問題がある。残る2つの構成要素のうち、脚の本数による分類は、一見単純にみえる。しかし、実際には、複雑な順列組みあわせという盲点が存在しており現実的でない。こ

れに対して、翼車軸支持具のヴァリエーションには、そのような複雑さはない。

5つの構成要素について検討した結果、翼車軸支持具による分類をおこなうことがもっとも単純かつ有効であると判断される。したがって、本論では、形態比較の分類指標を、伝世する唐箕の翼車軸支持具にみられる翼車軸の支持方法の違いに求めることにする。

唐箕の形態を、翼車軸の支持方法によって分類すると、次の5形式にわけられる。

翼車軸の指示方法による唐箕の形態分類

- ① 支柱支持型 翼車軸が太い柱によって支持されるものである。
- ② 脚柱支持型 翼車軸が起風胴部中央を貫通する脚により支持されるものである。支柱支持型は、翼車軸を支持する柱が脚と別材であるが、これは、脚が柱を兼ねている。
- ③ 横木支持型 翼車軸が短い横木により支持されるものである。
- ④ 縦木支持型 翼車軸が短い縦木により支持されるものである。
- ⑤ X脚支持型 翼車軸が脚の交点で支持されるものである。

以下では、ここに設定した5形式によって、各地の唐箕の形態を分類し、考察する。

3. 地域的傾向

江戸・明治時代の紀年銘唐箕、また、年号はなくとも取得年代の記憶が具体的かつ明瞭であり、これに準じると考えてよいと判断される唐箕は、先にもふれたように「紀年銘唐箕一覧Ⅰ 江戸時代」「紀年銘唐箕一覧Ⅱ 明治時代」として、文末に年代順に列記したとおりである。これらを、各地方ごとに先の5形式に即して分類すると、どのような傾向が認められるであろうか。

3-1. 近畿地方の唐箕

近畿地方に現存する唐箕は、51点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるものの15点、明治時代の年号銘があるもの36点である。

3-1.1. 支柱支持型

支柱支持型に該当する唐箕は、以下の29点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考	
1767	明和 4		船井郡八木町	*	
1808	文化 5	車屋八良兵衛	三津屋村通筋	伊丹市	*
1825	文政 8	京屋小三郎	富田林	河内長野市石見川	
1826	同 9	圍屋八良兵衛	三津屋村通筋	吹田市豊津	*
1827	同 10	山内□□兵衛	住吉安立町□□□	(堺市博物館)	*
1832	天保 3	扇米風車屋惣八	加西郡□□	神崎郡福崎町	棚 付
1838	同 9			西宮市越木岩町	*
1848	嘉永 1	車屋□之輔	印南郡國包□	西宮市塩瀬町	棚 付
1861	文久 1	京屋清兵衛	大阪農人橋式丁目	磯城郡川西町	
1863	同 3			(和歌山市立博物館)	
1867	慶応 3	京屋猪之助	若山中埜島北ノ丁	(和歌山市立博物館)	
1873	明治 6	京屋清兵衛	大坂農人橋貳丁目	八尾市山畑	
1874	同 7	京屋治兵衛	大坂農人橋式丁目	芦屋市西蔵町	
1880	同 13	本家京屋七兵衛	大坂農人橋貳丁目	八尾市亀井	
1884?	同 17?	本家京屋太兵衛	大坂農人橋貳丁目	堺市豊田	
1887	同 20	唐箕屋亦吉郎	住吉安立町九丁目	河内長野市長野町	*
1888	同 21	風車製造所金…		枚方市出口	*
1888	同 21	中家清蔵	…大谷村	(淡路町郷土資料室)	棚 付
1889	同 22	元唐箕萬・白 井式・製造販売 元脇坂商店	大和添上郡なら村	(大阪市立博物館)	*
1895	同 28	…屋弥右門・私 部機細工所大寅	河内交野郡私部…	枚方市交野	*
1896	同 29	大工中井兵吉	北淡町斗ノ内	津名郡北淡町	棚 付
1899	同 32			小野市	棚 付
1899	同 32	…や弥吉	印南郡國…	神戸市西区岩岡町	棚 付
1902	同 35	長谷川清右衛門	乙訓郡寺戸	長岡京市神足	棚 付
1903	同 36	本家京屋七兵衛	大阪農人橋二丁目	八尾市	
1905	同 38	…衛	淀川西岸桂本…	(大阪市立博物館)	*
1907	同 40	本家京屋太兵衛	大坂農人橋詰	八尾市	
1908	同 41	京屋太兵衛	大坂農人橋東詰	東大阪市	

1911 同 44 さし文山田文三 氷上郡石負村 氷上郡春日町 棚 付
郎

この型の唐箕には、起風胴部上部に棚板があるものとないものがある。そこで、棚板の有無により、上記の唐箕を細分類して各唐箕の製造地を点検すると、次のとおりである（※印は、製造地不明のため、使用地または収蔵地により分類したことを示す）。

棚板がある唐箕 8 点の製造地

「扇米風車屋惣八」	加西市付近
「車屋□之輔」	加古川市
「…や弥吉」	同
「山田文三郎」	兵庫県氷上郡
「中家清蔵」	同 津名郡
「中井兵吉」	同
無名※	小野市
「長谷川清右衛門」	城陽市

棚板がない唐箕 21 点の製造地

「京屋清兵衛」 2 点	大阪市東区
「京家治兵衛」	同
「京屋七兵衛」 2 点	同
「京屋太兵衛」 3 点	同
「山内□□兵衛」	同 住之江区
「唐箕屋亦吉郎」	同
「車屋八良兵衛」 2 点	同 淀川区
「…衛」	高槻市
「京屋小三郎」	富田林市
「金…」※	枚方市
「…屋弥右門」	交野市
「唐箕萬・白井式」	奈良県添上郡
「京屋猪之助」	和歌山市
無名※ 3 点	京都府船井郡・西宮市・和歌山市

両者を比較することによって、次のことが明らかになる。

1. 棚板がある唐箕の製造人たちは、主に大坂の西ないしは北方に展開している。
2. 対するに、棚板がない唐箕の製造人たちは、大坂中心の分布を示すとともに、主に大坂の東ないし南方に展開している。
3. 棚板がない唐箕の製造人には、京屋をなめる者が多く、10点が京屋製である。
4. 京屋をなめる者たちは、東区に集中している。そして、各唐箕の銘文で明らか

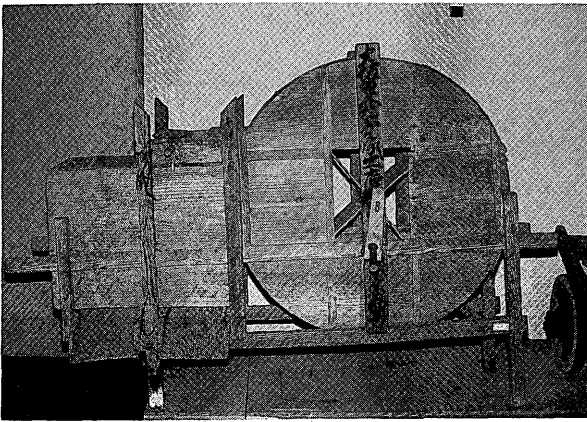


写真1 1825年 京屋小三郎製
河内長野市立郷土資料館所蔵

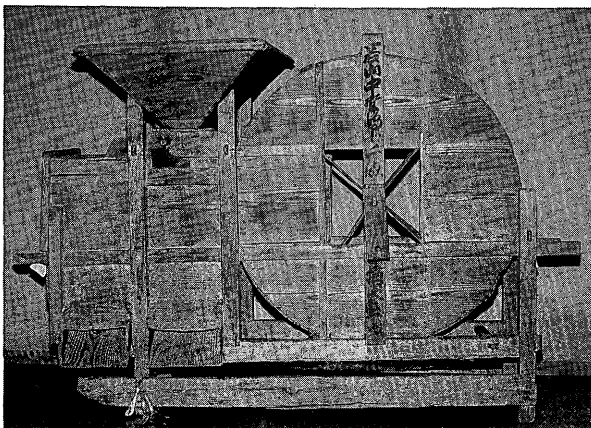


写真2 1867年 京屋猪之助製
和歌山市立博物館所蔵

唐箕(写真1参照)の銘文に「大坂農人橋本家出店 富田林京屋小三郎細工」、1867年の唐箕(写真2参照)の銘文に「若山中埜島北ノ丁大坂固…京屋猪之助」とあるので、やはり農人橋界限に本拠があったことがわかる。ちなみに京屋猪之助は、1876年に京屋治兵衛を襲名した人物であることが、芳井敬郎の報告によって判明している【芳井 1981: 19】。しかし、京屋以外に旧市内を拠点とした製造人はみあたらない。

京屋一族の動静は、芳井の報告に詳しい【芳井 1981: 11-21】。この一族は、早くから

農人橋界限を拠点として農具の生産に携わっていた。小谷が「京屋型」と呼んで西日本に普及した唐箕の代表とした [小谷 1981: 4-5] 唐箕は、彼らが製造したものにはかならない。

京屋製の唐箕は、起風胴部の支柱・支柱ともに上端を円弧にあわせて切断することで起風胴部の円形をきわだたせている。すなわち、唐箕の正面形態において、起風胴部の円形と選別胴部の方形そして漏斗部の三角形という、単純な幾何学形態の組み合わせによる洗練された造形処理をおこなっているのが特徴である。このような京屋製の唐箕の形態は、意匠として定型化されていたことが明らかである。棚板が取り付けられた方が便利であろうと考えられるにもかかわらず、京屋製の唐箕には、後年までそうした改変がみられない。おそらく、京屋の信用にかかわる意匠として、変更されることなく継承されていたのであろう。京屋の老舗意識がうかがえるようであり、わが国における唐箕の開発者が誰であったかを推理する場合に、大変興味深い現象である。

しかし、ほかにも備考欄に*印を付した製造人名不明の唐箕、たとえば1767年の唐箕(写真3参照)や、同じく*印を付した京屋以外の製造人名のある1808年「車屋八良兵衛」製の唐箕(写真4参照)、1887年「唐箕屋亦吉郎」製の唐箕(写真5参照)など、京屋製の唐箕に酷似した形態を示す資料は少なくない。これらの唐箕は、京屋をなめる者以外の資料を含めて、京屋系の唐箕であると認めることができる(図3a参照)。この系統の製造人は、大坂農人橋を本拠地としていた京屋を中心に「三津屋村通筋」「住吉安立町」など、大坂近辺に展開していた者が多かった。

棚板のない、全体の形状も非常によく似た唐箕が、京屋を中心に大坂近郊の製造人の唐箕に集中的にあらわれる理由は何か。

単なる意匠盗用の結果であるとの疑念も抱かなくはない。しかし、きわめてよく似

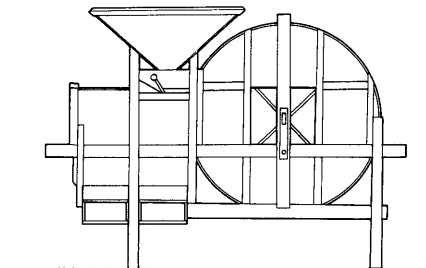


図3a 近畿 支柱支持型 京屋系

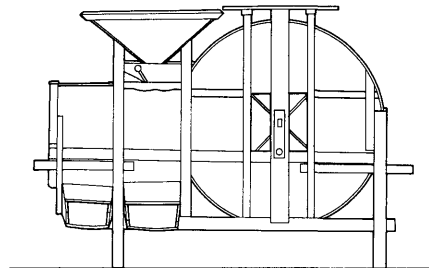


図3b 近畿 支柱支持型 準京屋系

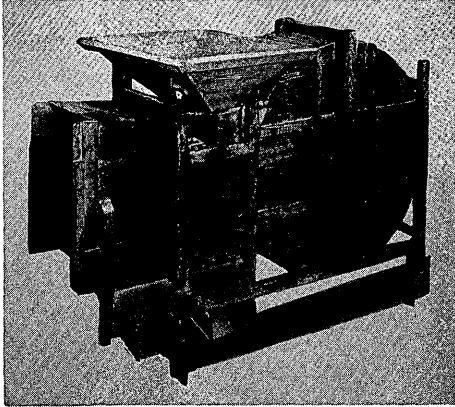


写真3 1767年 京都府立総合資料館所蔵
複写 [福田 1978: 口絵]

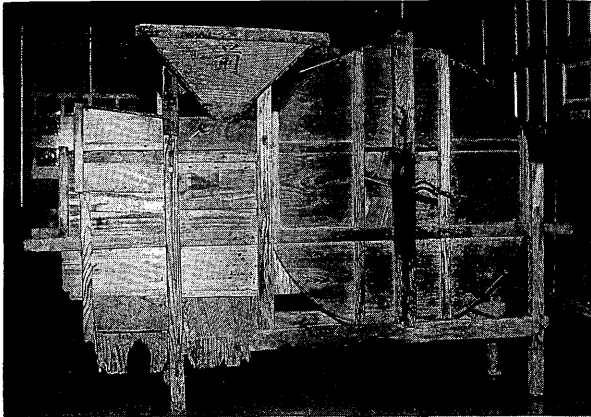


写真4 1808年 車屋八良
兵衛製
伊丹市立博物館所蔵

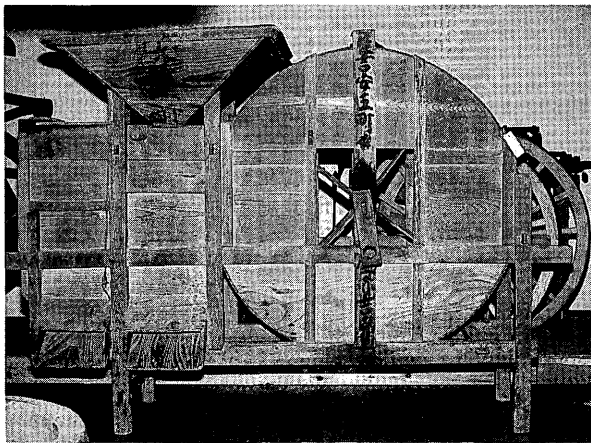


写真5 1887年 唐箕屋亦
吉郎製
河内長野市立郷土
資料館所蔵

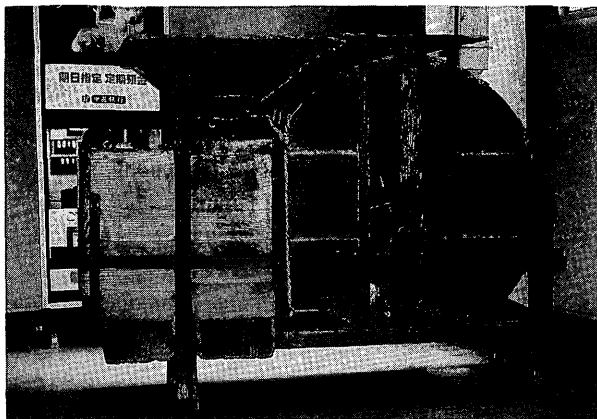


写真6 1832年 扇米風車
屋惣八製
兵庫県立歴史博物館
館所蔵

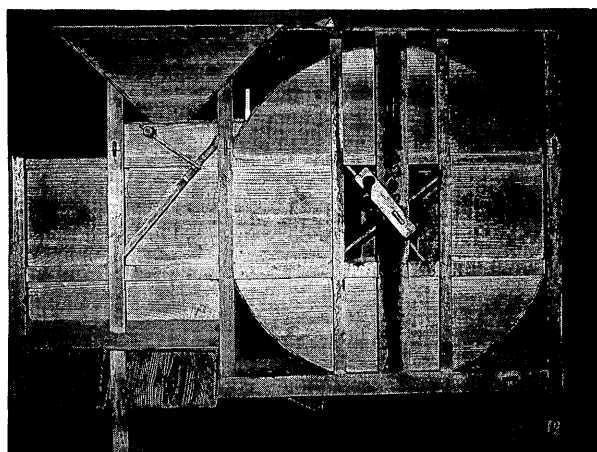


写真7 1888年 中家清蔵製
淡路町郷土資料室
所蔵

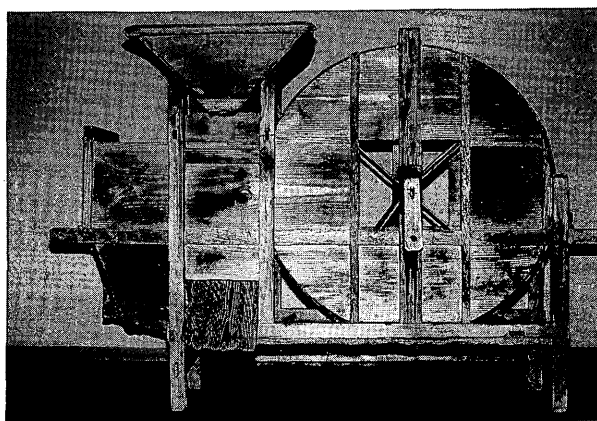


写真8 1863年
和歌山市立博物館
所蔵

た形態の唐箕を製造していた者たちと京屋一族との間には、本分家あるいは婚姻関係などにもとづくなんらかの技術提携があったのであろう。そして、それは、京屋系の唐箕が、大坂（上方）産というブランド商品として世間の評価を得ていたことを示しているのではないだろうか。

京屋系の唐箕が、大坂産の一流ブランドであるとするならば、ローカルな製造人たちがこれに対抗してシェアを獲得するためには、使用者に対してこれにまさる利点を訴えかけなければならない。棚板を取りつけたことは、そうしたアピールの一つであって、このような唐箕の製造人たちは、起風胴部の円形をきわだたせる造形感覚より使用者の便利さを考慮したものと思われる。したがって、京屋製の唐箕の改良型といってもよいが、本論では、準京屋系の唐箕と呼ぶことにしたい（図3b参照）。この系統に属する製造人には、1832年の唐箕（写真6参照）にみえる「扇米風車屋惣八」をはじめ、1848年の「車屋□之輔」、1888年の唐箕（写真7参照）の「中家清蔵」、1902年の「長谷川清右衛門」などがあつた。

京屋系の唐箕に特徴的な形態に部分的な変形を加えたとみられる唐箕には、ほかにも脚や樋口の配列を変えたものがある。1911年の唐箕の「山田文三郎」は「水上郡石負村」とあつて、これは現在の水上郡水上町石生に該当する。近接して同町横田には「森川屋吉竹麻夫」という唐箕製造人もいた。[兵庫県立歴史博物館 1991: 16, 19]。両人の製造にかかる唐箕の形態はよく似ており、脚が起風胴部端部になく、内側によせられている。1863年の唐箕（写真8参照）は、棚板はないが、樋口が前後に振りわけられている。近畿地方では、樋口が前後に振りわけられた唐箕はあまりみられない。これらの唐箕も、京屋製の唐箕の意匠に部分的な改変を加えているという点では、棚板を取りつけた唐箕と同じく準京屋系の唐箕としてよい。準京屋系の唐箕をてがけた製造人たちに関しては、改変の施し方の相違によってさらにいくつかの系統に整理可能であろう。

3-1,2. 脚柱支持型

脚柱支持型に該当する唐箕は、以下の1点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1886 明治19	大工近藤佐十郎		神崎郡福崎町	

この資料は、起風胴部下部に千石とおしのように網を取りつけたきわめて特異な形態を示す（写真9参照）。近畿地方には、千石とおしと唐箕を合体させたこのような

特異な形態の唐箕（以下、とおしつき唐箕と記す）がほかにもいくつか伝世しているが、紀年銘のある資料はこの1点だけである。

とおしつき唐箕については、他地方の特異な形態の唐箕とともに検討する必要があるが、後述する。

3-1.3. 横木支持型

横木支持型に該当する唐箕は、以下の13点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1854 嘉永 7	大道屋利兵衛	播州竜野在二塚村	神戸市北区八多町	棚付 F
1855 安政 2	藤箕屋忠治・同 兵吉	但馬出石新町	福知山市甘栗	棚付 I
1863 文久 3	澤困豊治 平右衛門	出石新町	出石郡但東町	棚付 I
1870 明治 3	澤木忠次	但州出石新早	舞鶴市西方寺	棚付 I
1876 同 9			養父郡養父町	F
1878 同 11	本家隠居屋	二塚村	揖保郡揖保川町	棚付 F
1881 同 14		但馬出石…	与謝郡加悦町	棚付 I
1882? 同 15	大工林栄蔵	但馬国出石材木町	(上夜久野町資料館)	棚付 I
1887 同 20	大工林源六・同 万吉	但馬国出石材木町	福知山市上野条	棚付 I
1890 同 23	富屋良三郎	佐方村	相生市	棚付 F
1893 同 26	細工人野村徳蔵	但馬国七美郡村岡町	小野市	棚付 I
1893 同 26	大工□瀧因	出石材木町	(上夜久野町資料館)	棚付 I
1911 同 44	上田達造	出石内町	(福知山市文化史料館)	棚付 F

1893年の唐箕にみえる「但馬国出石材木町 □瀧因」は、1887年の唐箕（写真10参照）の製造人「大工林源六」であろう。また、1870年の唐箕（写真11参照）の製造人「澤木忠次」は、1863年の唐箕（写真12参照）の製造人「澤困豊治」と無縁ではなかろう。この型の唐箕の全体形態は、京屋製の唐箕に酷似している。京屋製の唐箕の翼車軸支持具をアレンジした準京屋系の唐箕であるともいえないが、翼車軸の支持方式を変更している点で、構造の根幹にかかわる相違を生じている。この型の唐



写真9 1886年 大工近藤佐十郎製
三木家所蔵

箕にも、起風胴部上部に棚板があるものとないものがある。ただ、棚板がないものは1876年の唐箕1点だけであり、棚板の有無は、ここでは支柱支持型の場合のように有効な細分類のてがかりにはならない。しかし、別の形態差によるならそれが可能である。

この型の唐箕は、本体下部の木取りの違いによって2種類に分けることができる。つまり、起風胴部下部の選別同部への接続点が樋口部に接したもの（写真13参照）と、かなり離れたもの（写真14参照）の2種類である。備考欄に、接続点が樋口部に接したものにはF記号を、離れたものにはI記号を付して両者の違いを示した。

F記号を付した唐箕の製造人たちは、播磨地方西部に展開しており [近藤 1988: 135-138]、I記号を付した唐箕の製造人たちは、出石郡出石町を拠点として活動していた。そのことから、両者は、きわめて近似した形態を示しているものの、一応別の系統とみることができる。前者を二塚系の唐箕（図3c参照）、後者を出石系の唐箕（図3d参照）と呼ぶことにする。

この型の唐箕にも、脚の配列を変えているものがある。1911年の唐箕（写真15参照）である。脚の配列のみに着目するなら、「山田文三郎」や森川屋の唐箕との類似が指摘できる。「上田達造」は「出石内町」に居住していた。しかし、その製造にかかる

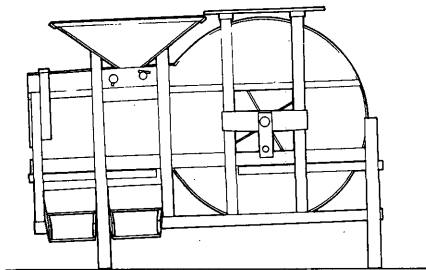


図3c 近畿 横木支持型 二塚系

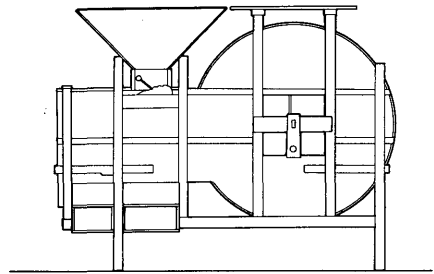


図3d 近畿 横木支持型 出石系

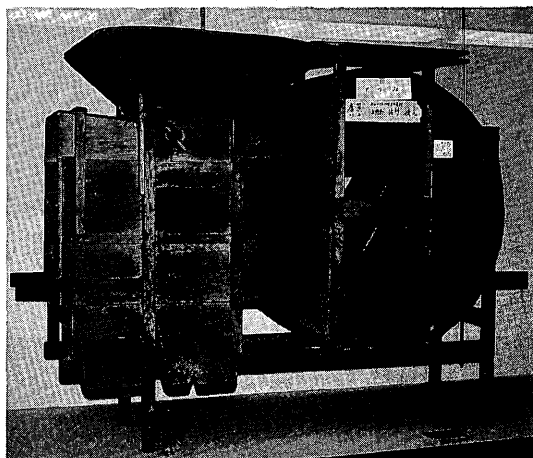


写真10 1887年 大工林源六・万吉製
福知山市文化史料館所蔵

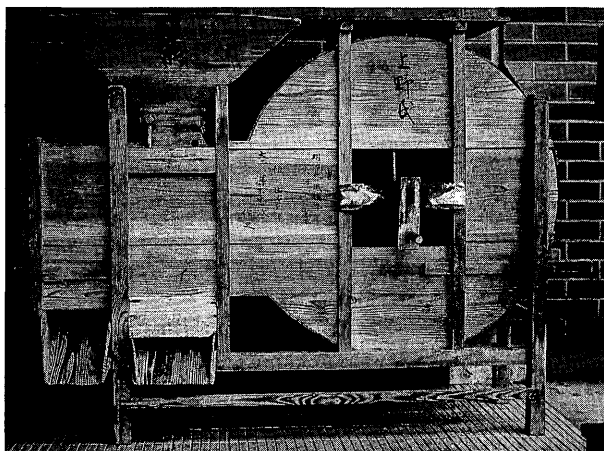


写真11 1870年 大工澤木忠次製
京都府立丹後郷土資料館所蔵

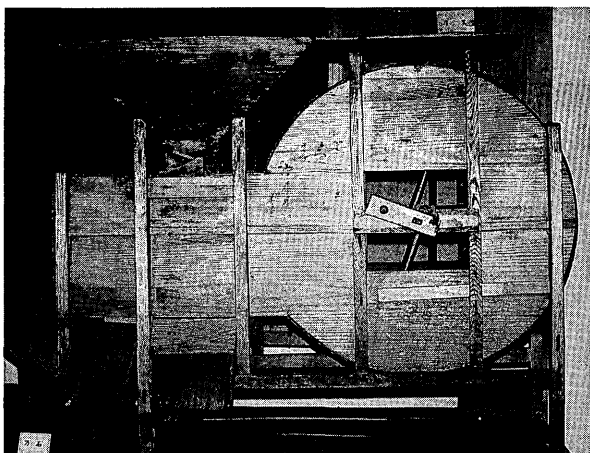


写真12 1863年 大工澤困
豊次・平右衛門製
赤花郷土資料館所蔵

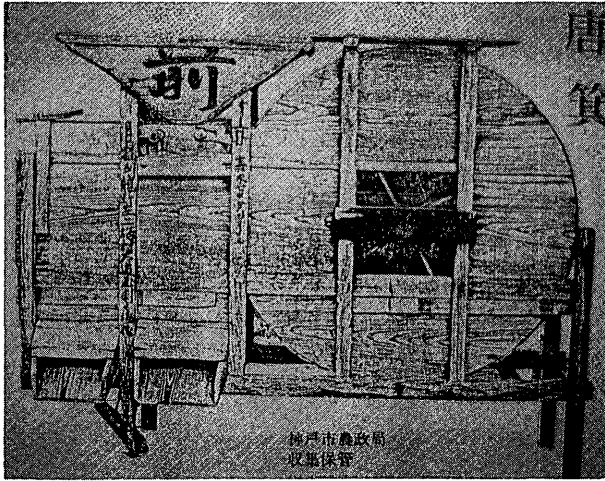


写真13 1854年 大道屋利兵衛製
神戸市農政局 複製 [和田 1974: 27]

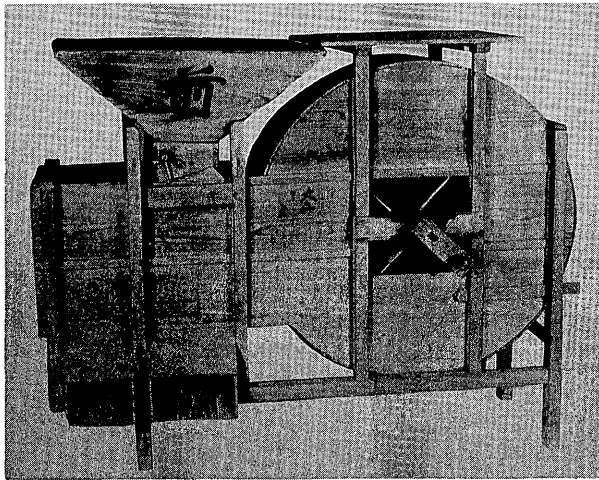


写真14 1855年 大工藤箕屋忠治・兵吉製
京都府立総合資料館所蔵 複製 [福田 1978: 38]

唐箕の形態は、ほかの出石系の唐箕と異なり、起風胴部端部の脚が廃されて内側によせられ、また、起風胴部下部の選別胴部への接続点の位置をみるなら二塚系を示している。このような形態上の特徴は、二塚系と出石系の唐箕の関係を考えるうえで注目される。

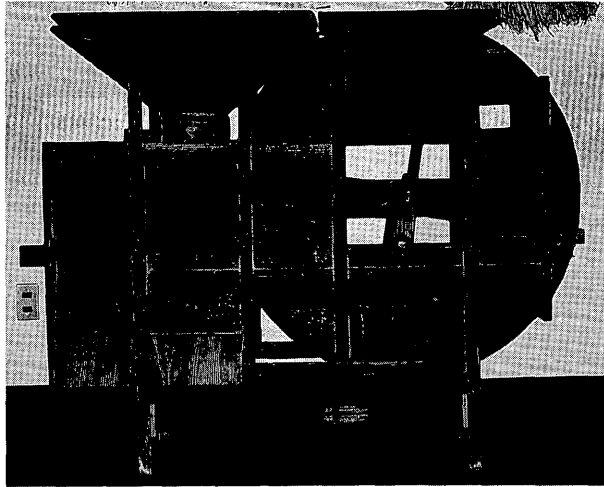


写真15 1911年 上田達蔵製
福知山市文化史料館所蔵

3-1,4. 縦木支持型

該当資料なし。

3-1,5. X脚支持型

該当資料なし。

3-1,6. 支持型不明

後世に大幅な改変をおこなったと判断されるものや、銘文のみが知られて形態の不明な資料は、以下の8点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1850 嘉永 3	細工人巧工佐七	播州尼□□東大寺筋	西宮市甲子園口	
1872 明治 5	扇□車屋重兵衛	印南郡加古川	高砂市米田町	
1887 同 20	勝田栄吉	寺垣戸村	吉野郡下北山村	
1889 同 22	(原田式)		鳥羽市本浦	
1891 同 24	製造職工小田仙治郎		天田郡夜久野町	
1903 同 36			鳥羽市岩倉町	
1905 同 38			(和歌山市立博物館)	

1906 同 39 (佐々木鶴吉 佐治村)

氷上郡青垣町

1850年の「巧工佐七」銘資料は、漏斗部のみが残る。1872年の「重兵衛」銘唐箕は、加古川市域で製造されていた。加古川周辺でみられる無銘の唐箕には、準京屋系の形態を示す唐箕が多くみられることから、これも準京屋系の唐箕であると推定される。1891年の「小田仙治郎」銘唐箕も出石系の可能性が高いが、断定はさける。1906年の唐箕の「佐々木鶴吉」は、製造人名であるのか使用者名であるのか不明である。

3-1.7. 分布の傾向

近畿地方においては、大坂を中心に支柱支持型の唐箕が生産されていた。これには、大坂を拠点とした京屋系の唐箕と、これを模倣改良したと考えられる準京屋系の唐箕があり、後者は前者の周縁部地域に居住する製造人によって生産されていた。横木支持型の唐箕も同様に周縁部地域に展開していて、これには二塚系の唐箕と出石系の唐箕があった。京屋系・準京屋系・二塚系・出石系の各唐箕の伝世状況からは、それぞれのシェアがかなり明確にわかれていた様子がうかがえる。反面、それらの唐箕は、全体の形態がおおむね共通しており、各系統の製造人のあいだに比較的親密な交渉のあったことが想像される。

3-2. 中国地方の唐箕

中国地方に現存する唐箕は、8点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるもの4点、明治時代の年号銘があるもの4点である。

3-2.1. 支柱支持型

支柱支持型に該当する唐箕は、以下の2点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1834 天保5			岡山市一宮	
1874 明治7	水戸仙助	豊田郡野良村	御調郡久井町	

ともに京屋系に近似した形態を示す。ただし、1874年の唐箕は、樋口が前後に振りわけとなっているほか、1922年に「貞谷茂一」によって「改良唐箕米粒排出加減機」を取りつける改造がおこなわれている。

3-2.2. 脚柱支持型

該当資料なし。

3-2,3. 横木支持型

横木支持型に該当する唐箕は、以下の3点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1861 文久1			高梁市方谷	F
1861~3文久□			都窪郡早島町	F
1898 明治31	本藤屋吉川屋平 四郎	鳥取市瓦町	東伯郡大栄町	F

1861年の唐箕(写真16参照)、1861~3年にあたる「文久」年間の銘がある唐箕は、二塚系の唐箕の形態を示している。ともに製造人名は明らかでないが、このことから、二塚系の製造人の製作になるものと判断される。1898年の「本藤屋吉川屋平四郎」製の唐箕(写真17参照)も、ほぼ二塚系の唐箕の形態を示すが、1911年の「上田達造」製の唐箕に似て起風胴部の脚が内側によっている。この唐箕の年号は、本体に貼りつけられた「褒状写」記載のものである。したがって、この年に製造された唐箕であると断定することはできない。唐箕そのものの製造年代は、いくぶんか前後する可能性が高い。

近畿地方におけるこの型の唐箕すなわち出石系・二塚系唐箕の場合には、1876年の唐箕のみ棚板がなかったが、中国地方のこの型の唐箕にはいずれも棚板がない。横木支持型の唐箕にみられるこの現象は、今後、資料の蓄積をまって検討する必要がある。

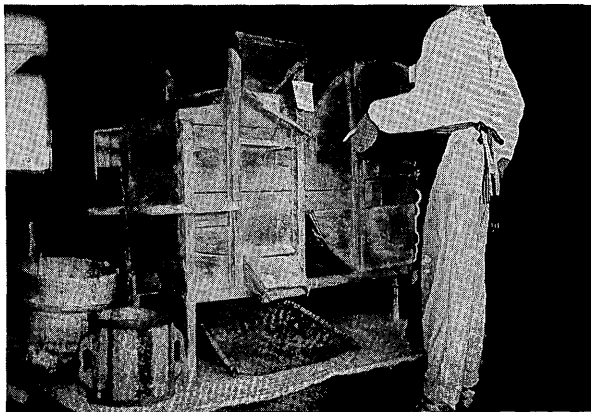


写真16 1861年
高梁市郷土資料館所蔵

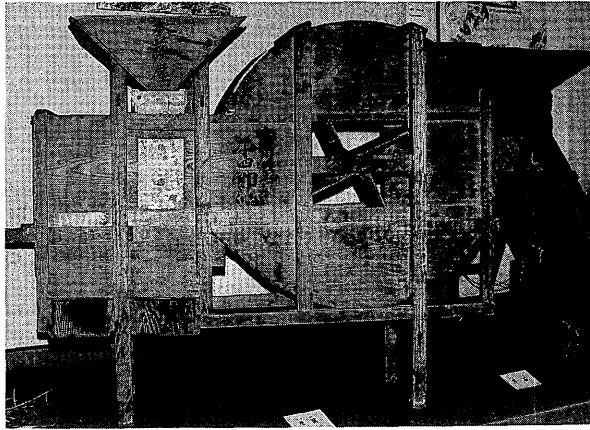


写真17 1898年 吉川屋平四郎製
鳥取県立博物館所蔵

3-2.4. 縦木支持型

中国地方においては、江戸・明治時代の資料に関してこの型に分類される資料の所在が知られていない。ただ、若干補足しておくなら、神田三亀男が広島県世羅郡甲山町宇津戸（旧御調郡宇津戸村）に、数代にわたり、多くの唐箕製造人があったことを報告している【神田 1990: 1-5】。宇津戸で製造された古い大型唐箕として掲載された写真は、1940年頃まで製造されていた唐箕の一例¹⁰⁾ のようであり、翼車軸の支持方法は、縦木支持型を採用している。棚板はなく、脚の位置が起風胴部端部でなく内側におかれている。

この型の唐箕は、山口県大島郡東和町でも使用されていた【宮本 1979: 221】。

3-2.5. X脚支持型

該当資料なし。

3-2.6. 支持型不明

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1832 天保3			笠岡市吉田	
1881 明治14	大工赤松又郎		備前市香登本	
1888 同 21	菊三郎	御庄村山里	岩国市中津	

10) 神田三亀男は、広島県世羅郡甲山町在住の唐箕職人からの聞き書きとして、同地では1930年代に小型唐箕の製造が開始されたことを報告している【神田 1990: 3-4】。

中国地方での初出となる1832年の唐箕は、1950年の修理により小型唐箕に変更されており、旧状の形態が判明しない。1888年の唐箕の銘文にみえる「御庄村山里」は、現在の岩国市域に属し、「菊三郎」が地元の製造人であつたらしいことが推測できる。

今は中国地方西部地域に私の調査が及んでいない。この地域の状況については、今後の調査を経て明らかにしたい。

3-2.7. 分布の傾向

資料数がじゅうぶんではないものの、中国地方においては、山陽側には支柱支持型の唐箕とともに横木支持型の二塚系の唐箕が、山陰側には二塚系あるいは出石系の唐箕が流通していた様子がうかがえる。一方で、地元の製造人のなかには、東日本に普及をみた縦木支持型に共通する唐箕を製造するものもあった。ただ、江戸・明治時代の銘文をもつ縦木支持型に分類される唐箕は現れていない。

3-3. 四国地方の唐箕

四国地方に現存する唐箕は、9点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるもの2点、明治時代の年号銘があるもの7点である。

3-3.1. 支柱支持型

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1859 安政 6	松蔵	御林前□通筋	綾歌郡綾上町	
1874 明治 7	赤井農具製作所	香川県平井町	(瀬戸内海歴史民俗資料館)	
1878 同 11	柳屋利平	吉田	大川郡引田町	
1884 同 17	豊嶋屋嘉兵衛	姿嶋今橋筋	高松市亀水町	
1894 同 27	豊嶋屋嘉兵衛・赤井農具製作所		大川郡長尾町	
1895 同 28			板野郡大山村	
1905 同 38	豊嶋屋嘉兵衛	松嶋今橋筋	坂出市大屋富町	
1912 同 45	村尾秀次	前田村長淵	大川郡寒川町	

四国地方の唐箕は、支柱支持型が一般的であつたと考えてよい。そして、おおむね京屋系に属する形態を保持しているが、1878年の「柳屋利平」製の唐箕は、起風胴部端部の脚が内側によっていて準京屋系に属する。

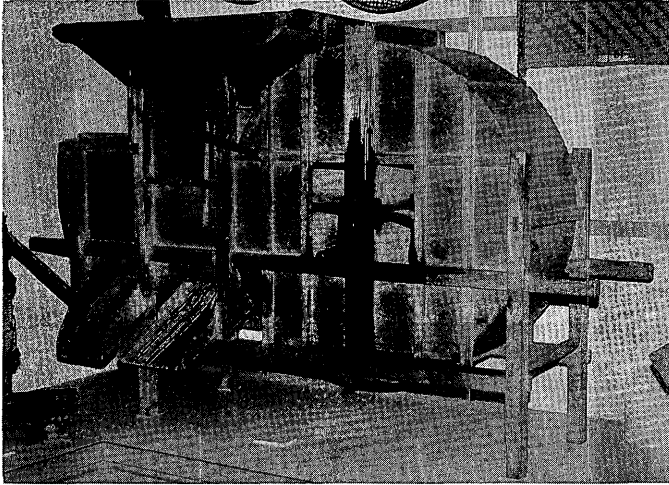


写真18 1913年 大工豊嶋製
愛媛県立歴史民俗資料館所蔵

目下、高知県・愛媛県下に江戸・明治時代の紀年銘唐箕の出現例はないが、伊予郡松前町で使用されていた1913年の唐箕(写真18参照)は京屋系の形態をとどめており、「郡中□町 豊嶋」の銘があることから、高松市内に本拠があった豊嶋屋嘉兵衛との関係が推測される。対象を江戸時代から明治時代の年号銘文がある資料に限定したために、これが脱落したが、この地方の状況を知ることができるとしておく。ちなみに、現在判明している限りにおいて、唐箕・万石とおしともに、四国はほかの地方にくらべて一番出現時期が遅く、唐箕は1844年、万石とおしは、1852年が初出である。この万石とおしは、山口県大島郡の大工が製造し、東宇和郡城川町で使用されていた【日本常民文化研究所 1981: 43】。

なお、四国のこの型の唐箕には、無銘の資料のなかに樋口が前後に振りわけられたものが散見される。

3-3,2. 脚柱支持型

該当資料なし。

3-3,3. 横木支持型

該当資料なし。

3-3,4. 横木支持型

該当資料なし。

3-3.5. X 脚支持型

該当資料なし。

3-3.6. 支持型不明

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1844 天保15	園(紀)田屋	松嶋今橋	綾歌郡綾南町	

1844年の唐箕には、数度にわたる補修の跡があり、どの程度原形をとどめているか明らかでない。製造人名も「藤田屋」か「紀田屋」か判断できない。

3-3.7. 分布の傾向

四国地方に関しては、なお精査を要するものの、ひとまず、支柱支持型の京屋系の唐箕が主流であり、一部に準京屋系の唐箕も流通していたと判断してよいと思われる。

3-4. 九州地方

九州地方に現存する唐箕は、5点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるもの4点、明治時代の年号銘があるもの1点である。

3-4.1. 支柱支持型

支柱支持型に該当する唐箕は、以下の3点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1789 寛政1			玉名郡長洲町	
1854? 嘉永7?			西臼杵郡高千穂町	
1859 安政6			山鹿市石	

1789年の唐箕(写真19参照)と1859年の唐箕は、ほぼ同様の形態とみることができ、牛島盛光が紹介した「植木町の唐箕」とも類似している。熊本県下では、天保年間に八代市植柳で唐箕の製作が開始されたという。和久田式唐箕である【牛島 1981: 70-71】。玉名郡長洲町や、山鹿市石で使用されていた唐箕の形態が、和久田式唐箕に継承された可能性は高いと思われる。

九州地方にみられる唐箕は、近畿地方以西の各地にみられる唐箕と比較したとき、かなり趣の異なる形態を示している。京屋系の唐箕からの展開とは考えにくく、別の系統に分類しなければならないものである。そこで、これらを熊本系の唐箕と呼ぶこ



写真19 1789年
熊本県・個人蔵
複写 [熊本日日新聞社
1977: 341]

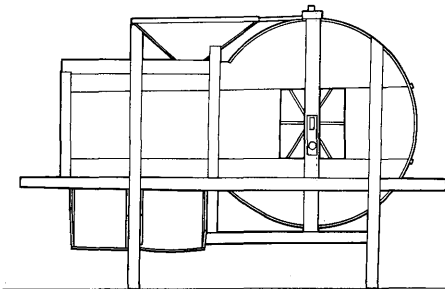


図4a 九州 支柱支持型 熊本系

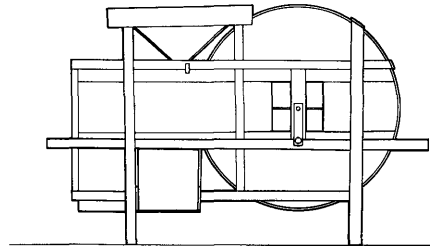


図4b 九州 縦木支持型 熊本系

とにする(図4a参照)。熊本系の唐箕は、横方向の栈木を用いないために板材の継ぎ目があらわである。そのため、脚と支柱そのほかの支柱・縦の栈木という垂直線が強く印象に残る。もっとも、こうした垂直線に対して運搬用の把手ともなっている太い横木が貫通し、真一文字に伸びて本体から左右にかなり突出しているので、形態の緊張感は失われていない。このような形態からうける印象も影響しているのであろうが、かなりの重量感も感じさせる。

1854年かとされる唐箕は、宮崎県西臼杵郡高千穂町で使用されていた。泉房子は、この年代は、もとの所有者による口伝であり、年号などの墨書は判読できないとしている[泉 1980: 146-147]。この唐箕も、熊本系の唐箕と共通した形態を示している。

3-4.2. 脚柱支持型

該当資料なし。

3-4.3. 横木支持型

該当資料なし。

3-4.4. 縦木支持型

縦木支持型に該当する唐箕は、以下の1点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1897 明治30	(山口初治)		本渡市楠浦町	

もとの所有者名とともに「山口初治」の銘があるが、製造人名であるのか、資料館に寄贈した人物以前にこの唐箕の所有者であった者の氏名なのか、その点は不明である。この唐箕の形態は、熊本系の唐箕に似るが、支柱支持型ではなく縦木支持型の構造を採用している。また、樋口が前後に振り分けられている。支柱支持型の熊本系の唐箕に対して、縦木支持型の熊本系の唐箕としておく(図4b参照)。

3-4.5. X脚支持型

該当資料なし。

3-4.6. 支持型不明

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1819 文政2	島村伴之	坂下前原村	玉名郡岱明町	

「島村伴之」は、目下のところ九州地方の唐箕製造人としては、私が知る唯一の人物であるが、彼の製造した唐箕の形態は明らかでない。

3-4.7. 分布の傾向

九州地方の唐箕に関しては、私自身が実際に赴いて調査をおこなうにはいたっておらず、その解明は今後の課題である。ただ、熊本系の唐箕に2系統が存在することに関しては、注意しておく必要がある。

全体形態が似て支持型が異なっていることは、近畿地方における京屋系・準京屋系の唐箕と二塚系・出石系唐箕との間にもみられた。九州地方においても、上方を中心とした唐箕の開発とは別に、並行して独自の開発・普及のプロセスが存在したのではなかったかとの推測がなりたつからである。

3-5. 中部地方の唐箕

中部地方に現存する唐箕は、16点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるも

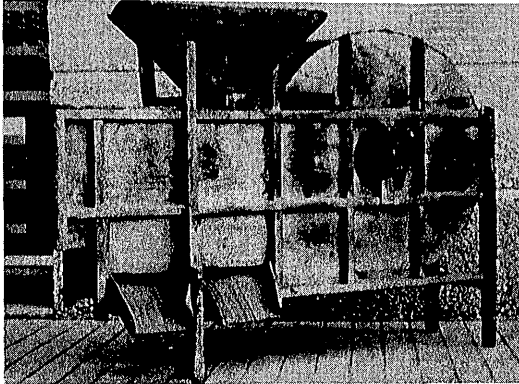


写真20 1782年
日本民俗資料館・松本市立博物館所蔵
複写【日本民俗資料館・松本市立博物館 1984: 10】

の4点、明治時代の年号銘があるもの12点である。

中部地方においては、天明年間の墨書があり、不鮮明ながらも1782年を示すのではないかとされる日本民俗資料館・松本市立博物館所蔵の唐箕¹¹⁾(写真20参照)が、一応もっとも古い資料であると位置づけておく。

3-5.1. 支柱支持型

支柱支持型に該当する唐箕は、以下の2点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1865 慶応1			揖斐郡徳山村	
1900 明治33	唐箕屋要助	岐阜市加和屋町	揖斐郡徳山村	

1865の唐箕は、京屋系の唐箕に類似するが、鑄造製歯車を取りつけて翼車軸を高速回転させるための改良が施されている。歯車を取りつけたほか、落下量の調節装置を変更した可能性もある。漏斗部が高くなりすぎている印象を抱くからである。しかし、この点を除けば、全体を変更するほど大きな改造にはいたらなかったと考えてよいと思われる。

1900年の唐箕も、京屋系の唐箕である。

3-5.2. 脚柱支持型

脚柱支持型に該当する唐箕は、以下の1点である。

11) 窪田雅之氏の教示による。

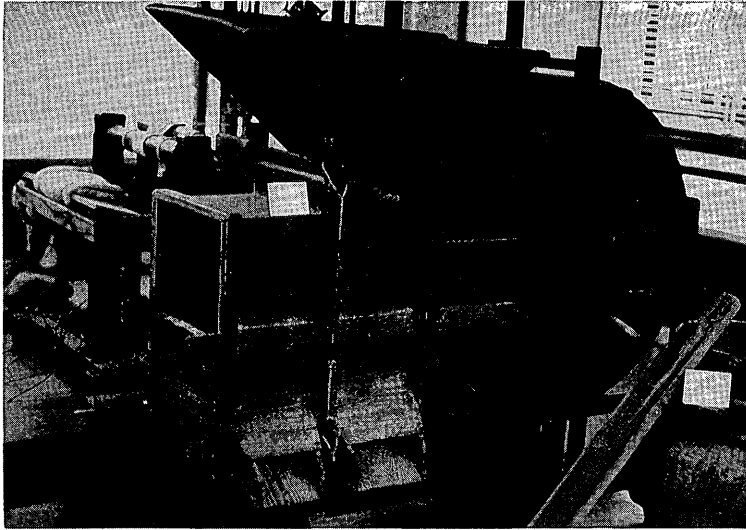


写真21 1910年 二木政太郎製
石川県立歴史博物館所蔵

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1910 明治43	細工者二木政太郎	金沢市春日町	金沢市	

全体の形態は、京屋系の唐箕に似るが、翼車軸の支持方法は異なり、多脚である(写真21参照)。

3-5,3. 横木支持型

横木支持型に該当する唐箕は、以下の1点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1872 明治5			古志郡山古志村	

これまでみてきた西日本各地の唐箕の形態と比較して、かなり異質な印象を受ける。起風胴部・選別胴部・漏斗部が一体に構成され、全体が横U字型を呈している。

3-5,4. 縦木支持型

縦木支持型に該当する唐箕は、以下の5点である。

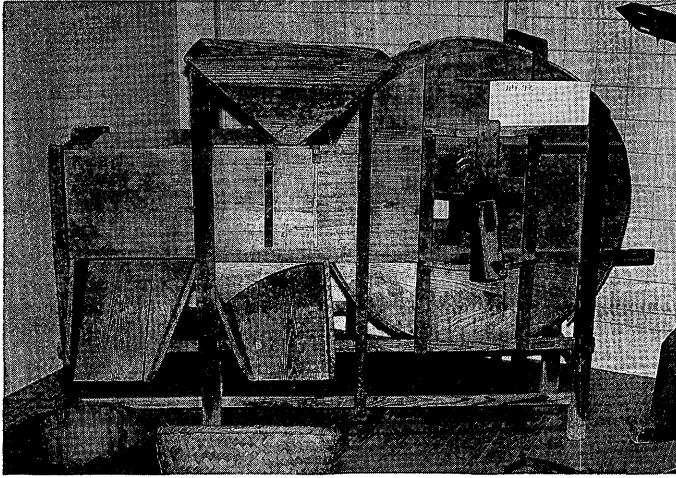


写真22 1905年 舞坂町歴史民俗資料館所蔵
写真提供：藤塚悦司氏

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1782? 天明2?			松本市元町	
1843 天保14	大工治□	寒水村	郡上郡明方村	
1891 明治24			北設楽郡豊根村	
1905 同 38			浜名郡舞坂町	
1908 同 41	製造人野村岩右エ門		沼津市原	

1782年の銘があるとされた唐箕と、1843年の唐箕は、形態全体から受ける印象が、中国地方西部にみられた縦木支持型の唐箕と類似する点がある。「寒水村」は、郡上郡明方村寒水であり、この時期に唐箕などの新しい農具が地元で調達されたことが判明する。

1891年の唐箕の形態は、主柱支持型の揖斐郡徳山村で使用されていた1865年の唐箕に似るが、主柱でなく長い縦木が起風同部の上端に達する形で、これに木製歯車を取りつけている。また、排出される穀物粒が混じりあうのを防ぐため樋口を左右に開き、大きく造作している。そのために選別同部はかなり長い。1905年の唐箕(写真22参照)も同様である。このような形態の唐箕は志摩半島にも分布をみるが、東海地方を中心に展開した独特のものと思われる(図5a参照)。

3-5.5. X脚支持型

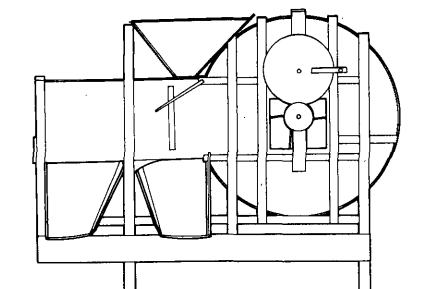


図5a 中部 縦木支持型

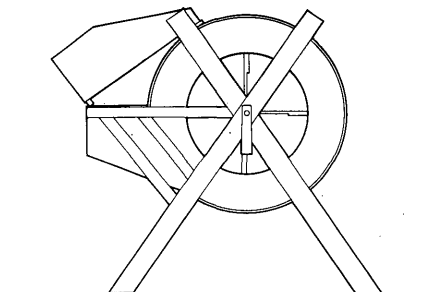


図5b 中部 X脚支持型

この型の唐箕は、江戸・明治時代の紀年銘唐箕があらわれていないが、明治時代にはすでにその存在が知られていた。木下忠は、これを「設楽式半唐箕」と名づけてその分布が北設楽郡を中心に、宝飯郡・南設楽郡など奥三河地方のほか、長野・岐阜両県に及んでいることを明らかにした【木下 1990: 6-7】。X脚の唐箕は、中部地方に特有の唐箕である（図5b参照）。

3-5.6. 支持型不明の唐箕

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1858 安政5			稲沢市	
1888 明治21			佐渡郡相川町	
1899 同 32	麩屋英治	下山県郡高富天王	揖斐郡徳山村	
1907 同 40			佐渡郡相川町	
1909 同 42	本家製造人杉山定治	郡上八幡赤谷町	郡上郡明方村	
1911 同 44	籾輦萱野多門		三方郡実浜町	
1911 同 44	製造人山下茂エ門	高山町川西	高山市西七日町	原田式片岡式

「萱野多門」唐箕の年号は、「柴崎龍太郎」による改造年である。

3-5.7. 分布の傾向

中部地方の唐箕を考察しようとする場合には、小坂がいう東日本型と西日本型の唐箕の製造または使用に関する境界がどこに存在するのか、あるいは、両者の折衷型が存在するのかなど、事前に想定される問題がいくつかある。小坂は、愛知県・岐阜県

下に伝世している唐箕を観察した結果をふまえて、この地域に東西型式の折衷型の存在を認めるような発言もしている¹²⁾。しかし、すでに指摘したとおり、小坂の提示した指標にもとづく3分類は、明確さを欠くものであった。したがって、この3分類を前提とした発想である境界の詮索には、深入りしない方がよいであろう。

それよりも私は、この地方に伝世する唐箕の形態にも、中国・九州地方にみられたように、やはり独自のものがあつたのではないかと疑って考察をすすめるべきかと思う。東海地方に展開した、木製歯車を取りつけて樋口を外に開いた唐箕は、その一例である。ほかの地方にはみられない木製歯車の使用は、背景にこの地方に紡績業がさかんであつたことを考慮すべきであろう。木製歯車の出現は、紡績機器の生産と無縁ではなかつたと思われる。

古島敏雄は、現在の吉城郡国府町にあたる地域の山間部農村に、寛政年間(1789~1801)に唐箕が導入されたことを『農具揃』の記事によって示した【古島1974: 357】。1782年かとされる唐箕は、飛騨地方ではなく松本のものであるから単純には比較できないが、この時代にかなり山間の農村部にまで唐箕が流通していたことは明らかである。しかも、関東地方に現存するもっとも古い唐箕が1826年、同じく東北地方のものが1808年であることを考えると、この地方の唐箕は、東西型式の折衷型から出発したのではなく、近畿地方の製造人の影響をうけて独自の製品を供給していた唐箕製造人が存在していたと考えてよいように思われる。そのような観点から1782年かとされる唐箕をみると、これは、中国地方の縦木支持型唐箕との類似が認められる。1843年の「大工治□」製唐箕も、ほぼ同様である。ただ、この唐箕は、小坂が折衷型の存在を主張する根拠とした資料のひとつであり、小坂が区分した指標の各項目対比に照らせば、東西両型式の特徴をわかちあつて備えていることは事実である。

中部地方の唐箕は、各支持型ごとの分布に、ある程度地域差が存在している。近畿地方に近い地域には、支柱支持型の唐箕をはじめ、その形態が京屋系あるいは準京屋系の唐箕に似た印象を与える唐箕がある。縦木支持型の唐箕は、信州と東海地方に分布し、後述する関東地方にみられる漏斗部が分離可能な唐箕と似た形態を示している。これに対して、新潟県の場合は、東北・北関東地方に伝世する漏斗部が本体と一体に構築される唐箕との近縁性を感じさせる。X脚支持型の唐箕は、江戸・明治時代の紀年銘資料がないが、北設楽郡を中心に、内陸部に局地的な分布を示している。

12) 前出注4、第44回民具研究会での発表で、小坂は1844年(山形県)と、1843年(岐阜県)の唐箕の脚数が4本であることをあげて、これらは近畿地方からの影響をうけているのであろうとした。

3-6. 関東地方の唐箕

関東地方に現存する唐箕は、14点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるもの9点、明治時代の年号銘があるもの5点であり、いずれも縦木支持型である。

3-6.1. 主柱支持型

該当資料なし。

3-6.2. 脚柱支持型

該当資料なし。

3-6.3. 横木支持型

該当資料なし。

3-6.4. 縦木支持型

関東地方の唐箕は、前述のとおり、いずれも縦木支持型である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1826 文政9	大工高水金治良	小中野邑	西多摩郡五日市町	棚付A
1839 天保10			青梅市長湊	棚付A
1842 同 13		(伝 佐野)	秩父市黒谷	棚付B
1856 安政3	大工保九良		多摩市一の宮	a
1857 同 4			渋川市南牧	棚付B
1858 同 5			日立市下深萩町	a
1863 文久3			笠間市片庭	b
1866 慶応2	(関塚太郎)		安蘇郡葛生町	棚付A
1867 同 3			西多摩郡日の出町	棚付A
1877 明治10			加須市樋遣河	a
1891 同 24			(群馬県立歴史博物館)	A
1895 同 28			川崎市川崎区	棚付a
1896 同 29			水戸市元吉田町	a
			*銘文は明治39の誤植か?	
1906 同 39			(埼玉県立博物館)	棚付a

江戸・明治時代の紀年銘唐箕は、いずれも江戸近郊でなく、かなり周辺地域から発見されている。

関東地方の唐箕には、漏斗部が本体から分離可能なものと不可能なものがある。この点に着目して、上記の資料を細分類する。また、操作方法のうえからは、翼車軸を回転させるにあたり、把手に長い棒を取りつけて横から押し突いて操作する突き唐箕と呼ばれるものがある。備考欄の記号は、漏斗部が分離するものをA・a、しないものをB・bとし、A・Bは、突き唐箕をあらわす。a・bは、突き唐箕ではないものである。なお、関東地方の唐箕には、製造人名や製造地名の銘文がないものが多い。

A, 漏斗部が分離する突き唐箕 (図6a参照) は、次の5点をかぞえる。

- 1826年 西多摩郡五日市町
- 1839年 青梅市
- 1866年 安蘇郡葛生町
- 1867年 西多摩郡日の出町
- 1891年 (群馬県)

1826年、1839年の唐箕は4脚、後者には、背負うための処置が施されていた [町田市立博物館 1991: 57]。1866年、1867年、1891年の唐箕は、多脚である。1867年の唐箕は、正面よりみた起風胴部を八角形にしており、類例がない。ただし、起風胴部自体は円形である。また、1891年の唐箕のみ、棚板がない。

a, 漏斗部が分離する突き唐箕ではない唐箕 (図6b参照) は、次の6点をかぞえる。

- 1856年 多摩市
- 1858年 日立市
- 1877年 加須市

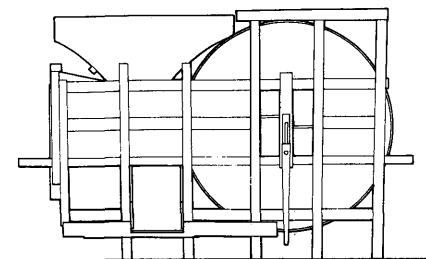


図6a 関東 縦木支持型 分離式突き唐箕

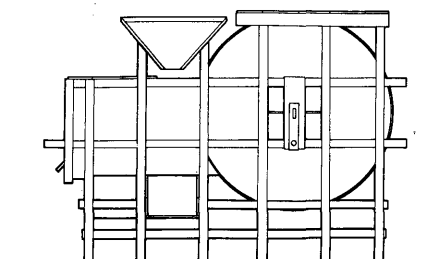


図6b 関東 縦木支持型 分離式

1895年 川崎市

1896年 水戸市

1906年 (埼玉県)

1858年, 1896年の唐箕は, 樋口が全面に並ぶ。1895年, 1906年の唐箕には, 棚板がつく。1856年の唐箕は, 改造されて歯車を取りつけられており, もとの軸木を取りかえた可能性がなくはない。

B, 漏斗部が分離しない突き唐箕 (図 6c 参照) は, 次の 2 点をかぞえる。

1842年 佐野市

1857年 渋川市

ともに方形の正面プランを意識しており, 棚板がつく。1842年の唐箕は, 佐野市で購入し, 秩父市まで背負ってきたものという [日本常民文化研究所 1980: 90]。

b, 漏斗部が分離しない突き唐箕ではない唐箕 (図 6d 参照) は, 次の 1 点である。

1863 笠間市

この唐箕の樋口は, 前面に並ぶ。棚板はない。

3-6.5. X脚支持型

該当資料なし。

3-6.6. 支持型不明

該当資料なし。

3-6.7. 分布の傾向

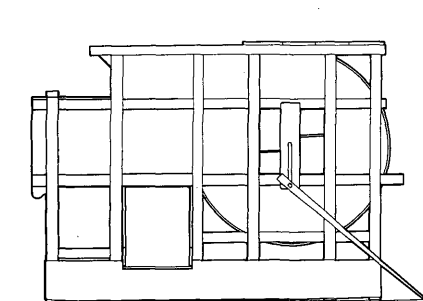


図 6c 関東 縦木支持型 固定式突き唐箕

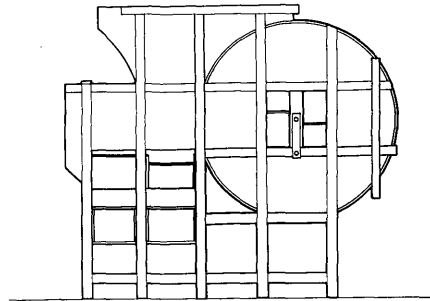


図 6d 関東 縦木支持型 固定式

関東地方の唐箕を語る場合、「上総唐箕」の成立とその流通範囲の把握が必要である。「上総唐箕」は、上総地方で生産された唐箕であるところから、このように呼ばれた。中心は、旧君津郡内で、埼玉県内の地域から技術を移入したとの伝承もある。最盛期には、関東地方ばかりでなく、ひろく東北・中部地方にも販路を拡げていた。大島暁夫は、「上総唐箕」の成立時期を、嘉永（1848～1854）・安政（1854～1860）時代を遡らないであろうとしているが【大島 1983: 150】、明らかに「上総唐箕」の形態を示している現存する年号のある唐箕では、1863年の唐箕がもっとも古い。

「上総唐箕」は、埼玉方面から移植したと伝えられているように、これに先行する唐箕の産地が存在した。その生産地はおそらく上野国あたりではなかったかと、私自身は想像している。「上総唐箕」の先行形態と認めてよいものが、次に述べる東北地方の唐箕のなかに少なからず存在するからで、東北地方での初出となる1808年の「大工善八」銘の唐箕が、すでにそのような形態上の類似を示している。

関東地方北部から東北地方の南部にかけての一带には、「上総唐箕」の原型と考えられる唐箕の分布がみられ、これは、小坂がいう東日本型の主要な一系統をなしていたと考えられる。

3-7. 東北地方の唐箕

東北地方に現存する唐箕は、22点である。うちわけは、江戸時代の年号銘があるもの16点、明治時代の年号銘があるもの6点である。

3-7.1. 支柱支持型

該当資料なし。

3-7.2. 脚柱支持型

脚柱支持型に該当する唐箕は、以下の4点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1839 天保10			山形市陣場	
1844 天保15			東村山郡中山町	
1856 安政3			東村山郡中山町	
1859 安政6			山形市高原町	

1839年、1844年、1859年の唐箕は、形態の類似が著しく、年代的にも同一の製造人の作である可能性が高い。1856年の唐箕は、これら3点にくらべて吸気口を横に広く

とるなど若干の相違を示す。いずれも4脚である（図7a参照）。

3-7,3. 横木支持型

横木支持型に該当する唐箕は、以下の6点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1809 文化6			(北上市博物館)	
1837 天保8	久内	会津北田村	米沢市	半唐箕
1857 安政4			西村山郡西川町	
1885 明治18	北田久内		河沼郡河東村	半唐箕
1888 明治21	北田平造		郡山市湖南町	
1894 明治27	大工上野	雫石	盛岡市	

1809年（写真23参照）と1857年の唐箕は、二塚系の唐箕に酷似する。しかも二塚系の唐箕で今日判明している初出の唐箕が1854年のものであることを想起するなら、この類似が提起する問題は大きい。二塚系の唐箕の起源は、陸奥・出羽国内に求めるべきなのであろうか。あるいは二塚系の唐箕は、播磨地方において相当に早く成立し、周辺地域だけでなくはるかに遠方までその流通圏を獲得していたのであったのか。

少なくとも、相互になんらかの交渉があって、唐箕製造の技術あるいは製品の移入がおこなわれたことは明白である。

ただ、1809年と1857年の唐箕の樋口は、双方とも前後に振りわけとし、後者の漏斗部はぶこつなほどに大型である。年号はないようであるが、北津軽郡鶴田町で使用されていた唐箕（写真24参照）は、樋口も前面に並び、まさに二塚系そのものといってよいほど近似している。

1888年、1894年の唐箕は多脚であり、それぞれ形態が異なる。歯車を取りつけてい

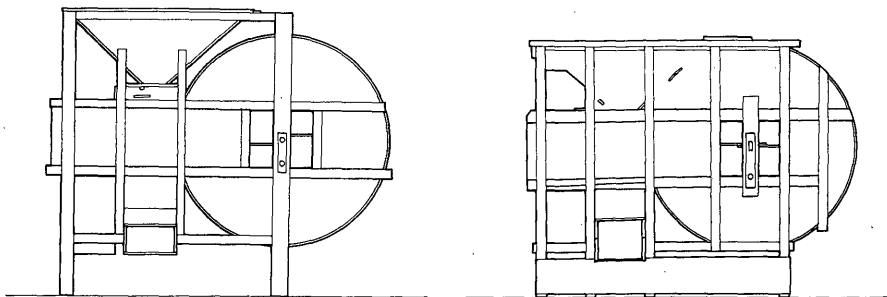


図7a 東北 脚柱支持型

図7b 東北 縦木支持型

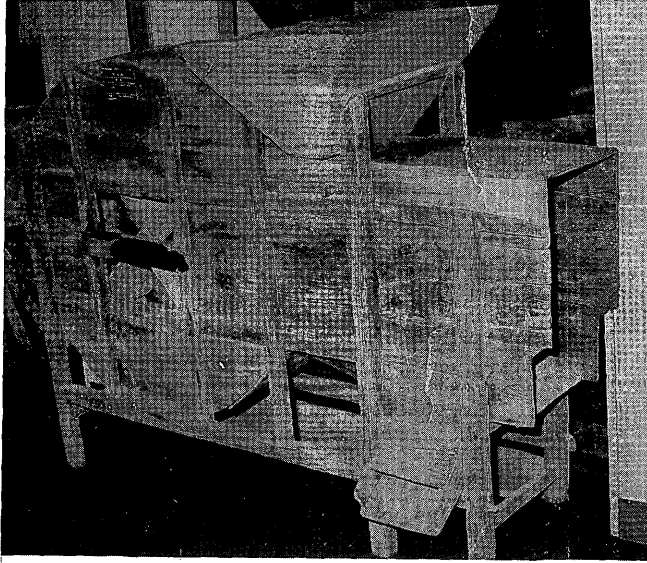


写真23 1809年 北上氏博物館所蔵
写真提供：佐々木長生氏

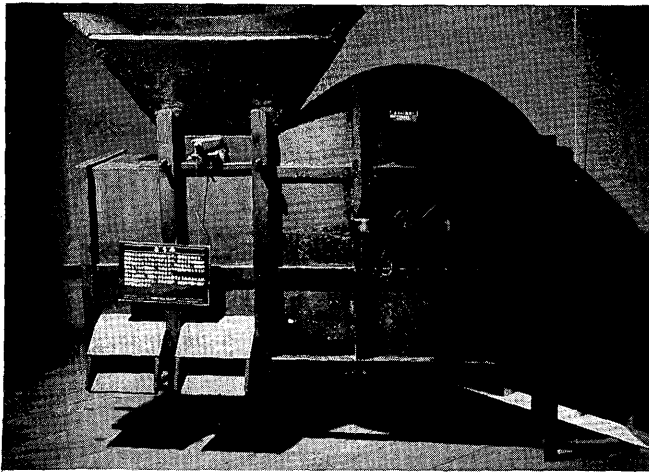


写真24 青森県立郷土館所蔵

る前者は、漏斗部が本体と一体の構造である。後者は漏斗部が分離可能である。

1837年と1885年の半唐箕は、通常の唐箕にくらべて半分程度の大きさしかないところから半唐箕と呼ばれている。半唐箕は、近畿地方に伝世するとおしつき唐箕という特異な形態を示す唐箕から、とおしの部分が脱落したような形態を示す。

3-7,4. 縦木支持型

縦木支持型に該当する唐箕は、以下の8点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1808	文化5 大工善八		南会津郡田島町	b
1811	文化8		郡山市湖南町	a
1834	天保5 井上龜藏事信善 光別當大願寺御 弟子法名善勇	丹波國天田郡直見村	南会津郡館岩村	b
1853	嘉永6		南会津郡田島町	b
1853	同 6		上山市金生	a
1859	安政6		南会津郡田島町	b
1866	慶応2		耶麻郡猪苗代町	b
1867	慶応3 糖箕師渡部伝之 壺		南会津郡田島町	b

わが国の唐箕の製造人として最初にその名前があらわれるのは、1808年の唐箕「車屋八良兵衛」であったが、現在のところ、田島町で使用されていた唐箕にみえる「大工善八」がこれに次ぐ。同年である。

東北地方のこの型の唐箕にも、漏斗部が分離可能なものと、本体と一体になったものがある。関東地方の唐箕同様、備考欄の記号aは分離可能、bは分離不可能な唐箕をあらわす。

a, 漏斗部が分離可能な唐箕

1811	郡山市
1853	上山市

b, 漏斗部が分離不可能な唐箕 (図7b)

1808	「大工善八」	南会津郡田島町
1834	「井上龜藏」「天田郡直見村」	南会津郡館岩村
1853		南会津郡田島町
1859		南会津郡田島町
1866	「北田久内」	耶麻郡猪苗代町
1867	「糖箕師渡部伝之壺」	南会津郡田島町

これらは、いずれも「上総唐箕」の原型に比定してよいほど形態上の共通点が多い。

1834年(写真25参照)の唐箕の製造人は、天田郡夜久野町の出身である。佐々木長生は、これを近畿地方の唐箕を原形として、会津地方の唐箕の形態を参考にして製作したものとの見解を示している【佐々木 1985b: 9-12】。しかし、近畿地方にはこのような形態を示す唐箕の存在が知られていない。私は、これもむしろ、関東地方北部から東北地方南部に展開している「上総唐箕」の原型に近いものであると判断したい。

3-7,5. X脚支持型

該当資料なし。

3-7,6. 支持型不明

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1850 嘉永3	大工太代治	横沢村	郡山市湖南町	
1875 明治8	久内		耶麻郡西会津町	
1905 明治38			南会津郡田島町	樋口1口
1905 明治38			大沼郡金山町	樋口1口

1875年の唐箕は、久内の製造とされている【佐々木 1985b: 5-6】ので、1866年の



写真25 1834年 井上龜藏製
館岩村教育委員会所蔵 写真提供：佐々木長生氏

同人製唐箕と同じく縦木支持型に分類してよいものであろう。ともに1905年の2点の唐箕は、半唐箕に1口の樋口を取りつけたもので、半唐箕の改良と考えてよいと思われる。

3-7.7. 分布の傾向

東北地方の唐箕には、脚柱支持型・横木支持型・縦木支持型の3形式が認められる。

脚柱支持型の唐箕は、山形県下にみられる。縦木支持型の唐箕は、福島県下を中心に分布し、この型の唐箕の原形は、関東地方北部に成立した唐箕に求めてよいと思われる。これらが比較的局地的に出現しているのに対して、横木支持型の唐箕は、岩手県から山形県・福島県まで広い範囲に分布している。ただし、これには半唐箕も含まれていて、その形態は一様ではない。

小坂は、山形県下で観察した唐箕に西日本型の特徴を示すものが若干あり、また半唐箕に関しても、西日本からの移入ではないかと思われるとし、時代が下ると東日本の唐箕も前面にはね柄を取りつけるなどして西日本型に近似してくる傾向があるとした【小坂 1980: 125-126】。しかし、実際には4脚の唐箕は、1809年の段階ですでに登場しており、必ずしも小坂の指摘したとおりではない。

小坂は、さらに、自身が示した分類指標に照らして、山形県下にみられる脚柱支持型の唐箕が4脚であることを念頭において、近畿地方からの影響をみようとしているが、脚柱支持型の唐箕は、近畿地方では、とおしつき唐箕にのみあらわれているにすぎない。ほかには、1910年の金沢市のものが知られるだけである。脚柱支持型の唐箕を西日本型のなかでとらえようとするのは、小坂が翼車軸の支持方法の観察に際して支柱支持型との構造の相違を理解しなかったことによる。

むしろ私は、東北地方の唐箕に関しては、近畿地方の横木支持型の唐箕との関係の解明と、半唐箕・とおしつき唐箕との関係の解明が重要であると判断している。

3-8. とおしつき唐箕・半唐箕

両者は、特異な形態の唐箕として、従来より注目されてきた。

まず、とおしつき唐箕についてであるが、その呼称は伝承的なものではない。本来の名称が不明なためにひとまず与えた呼称である。確認できた範囲では、所蔵者はおおむね他の唐箕と同じ名称で「唐箕」と呼びならわしていた。また、製造人による銘文をみるなら、姫路の「大工源助」が「千石」、「京屋太兵衛」が「千石通シ」と記している資料がある。

次に、半唐箕は、前者からとおしの部分を除外したような構造で、原則として樋口がない¹³⁾。

両者に関しては、まだその成立の事情も、通常の唐箕との関係も明確にされていない。

今日所在が確認されているとおしつき唐箕・半唐箕（樋口1口のものを含む）は、江戸時代の年号銘があるもの1点、明治時代の年号銘があるもの4点、そのほかのもの13点である。これらを、通常の唐箕と同様に翼車軸支持具の相違によって分類すると、次のとおりである。備考欄の記号は、Tがとおしつき唐箕、Hが半唐箕、Fが樋口1口のある半唐箕である。また、これらとは別に、相当数の「設楽式半唐箕」がある。

3-8.1. 支柱支持型

該当資料なし。

3-8.2. 脚柱支持型（図8a）

脚柱支持型に該当する唐箕は、以下の10点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1886 明治19	大工近藤佐十郎		神崎郡福崎町	T
1913 大正2	十河芳吉	大川郡造田村	(香川県)	T
—	本家京屋太兵衛	大坂農人橋東詰	八尾市亀井	T
—	本家京屋七兵衛	大坂農人橋二丁目	伊丹市昆陽	T
—	本家京屋七兵衛	大阪農人橋二丁目	大阪市東区備後町	T

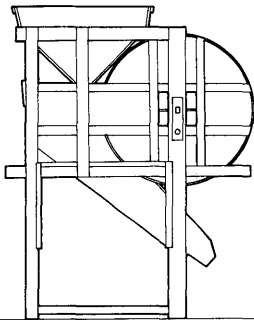


図8a 脚柱支持型

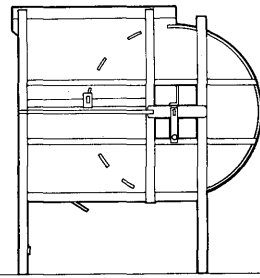


図8b 横木支持型

13) 改造の結果であろうか、樋口1口を有する半唐箕も若干存在している。

—	本家京屋七兵衛	大阪農人橋貳丁目	大阪市東淀川区豊里	T
—	杵屋松五郎	大坂西高津新道	尼崎市築地町	T
—	源助	姫路市□□元町	姫路市飾東町	T
—	源助	姫路市野里威徳寺町	朝来郡生野町	T
—	上田達		出石郡但東町	T

西日本に伝世するとおしつき唐箕は、1886年の「大工近藤佐十郎」製が年代の判明するもっとも古いものであるが、「京屋七兵衛」製の「大阪市東区備後町」で使用されていたもの（写真26参照）は、明治初期に入手したものと伝え [近藤 1984b: 2], 「杵屋松五郎」製も、幕末から明治初期にかけての資料である可能性が高い [森 1985: 14-18]。

「源助」銘の資料は、銘文に「姫路市」とあり、製作年代は1889年以後となる。

「京屋七兵衛」製の伊丹で使用されていた資料と「上田達」製の資料（写真27参照）には、鉄製歯車に取りつけられている。「上田達」製のおしつき唐箕は、他の製造人のものとは、かなりその形態が異なっている。出石の上田氏には、1911年の唐箕に「上田達造」の名がみえていたが、同一人と考えて支障ないであろう。

1913年の資料は、選別胴部を分割可能にしている。「十河式米麥撰別機」と称して1913年に実用新案を出願し、翌年登録されている¹⁴⁾。ここに示した資料（写真28参照）が出願年からどれ

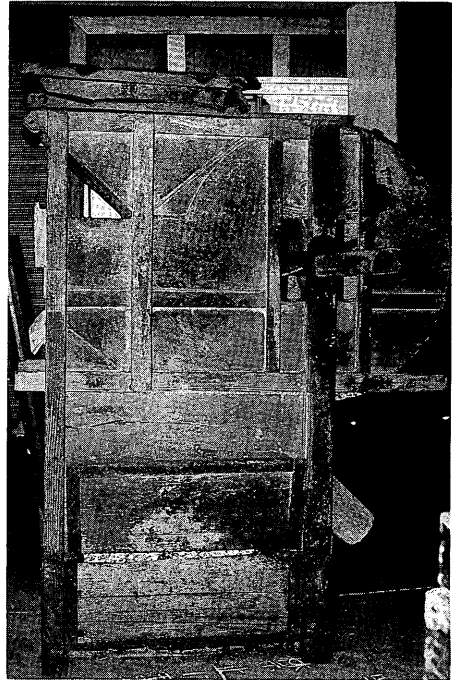


写真26 □□年 本家京屋七兵衛製
大阪市・個人蔵

14) 「十河式米麥撰別機」（1913年申請，登録実用新案第31958号）の考案者である十河芳吉は、香川県の人で、「大川郡造田村」は、現在の長尾町にあたる。彼は、「米穀精撰機」（1911年申請，登録実用新案第23234号）も考案している。これもおしつき唐箕の発想である。また，特許資料のなかには，これより早く奈良県の福井信治郎の出願にかかる「唐箕」（1893年公布，特許第1903号）があり，以来，さまざまな工夫にみちたおしつき唐箕が登録されている（実用新案・特許番号は，いずれも大阪府立夕陽丘図書館架蔵資料による）。

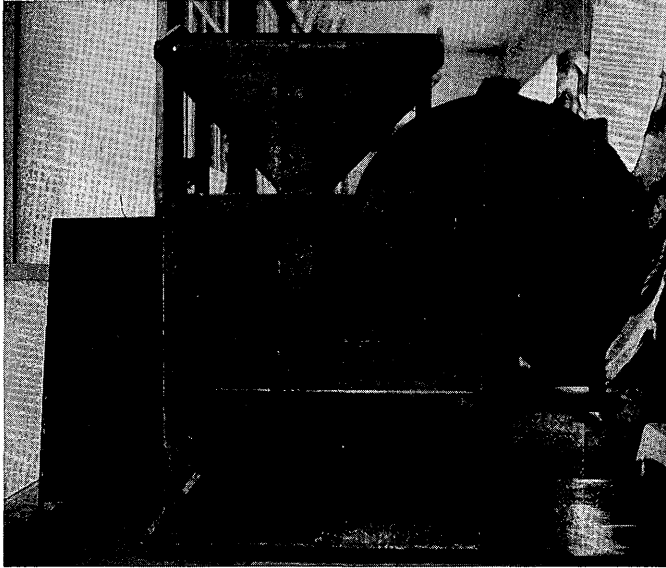


写真27 □□年 上田達製
赤花郷土資料館所蔵

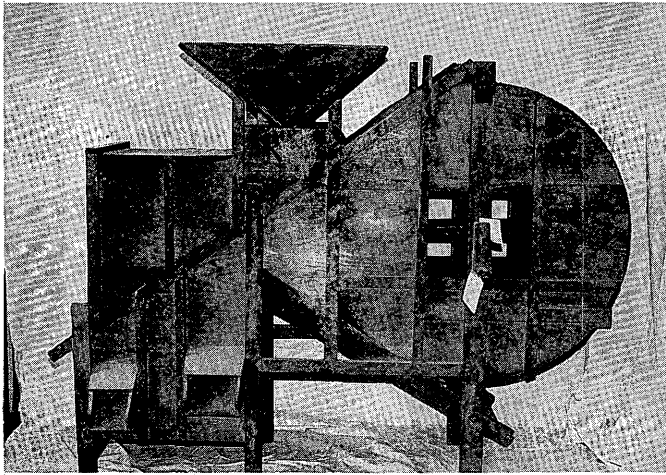


写真28 1913年 十川芳吉製
写真提供：桂真幸氏

ほど隔たるものか明らかではないが、出願年を上限と考えて掲げた。実用新案・特許登録製品に関しては、本稿で考察対象とする資料ではなく、むしろ、排除したいとした近代唐箕である。ここでは、それがいかに近世的な形態の唐箕とかけ離れているか

を示す一例として参考までに掲げた。

3-8.3. 横木支持型 (図 8 b)

横木支持型に該当する唐箕は、以下の 3 点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1837 天保 8	久内	会津北田村	米沢市	H
1885 明治 18	北田久内		河沼郡河東町	H
—			(四国)	T

1885年の半唐箕には、鉄製歯車に取りつけられている。

「久内」の製造にかかる半唐箕に関しては、伊勢参宮を契機として西日本の唐箕製造技術を得たとする伝承が採集され、報告されている [佐々木 1979: 9-10]。北田村は現在の河沼郡湯川村北田である。

年号不明のおしつき唐箕は、「昭和□拾□年」の銘がある。鉄製歯車を取りつけ、起風胴部を方形に形成し、樋口 1 口を選別胴部直下に前面に向けてもうけている。これも近代唐箕である。

3-8.4. 縦木支持型

縦木支持型に該当する唐箕は、以下の 3 点である。

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1916 大正 5	北田平造		耶摩郡猪苗代町	H
—			(南郷村歴史民俗資料館)	F
—			西置賜郡飯豊町	H

「北田平造」も、「久内」と同じく北田にあった。年代不明の樋口 1 口の半唐箕は、江戸時代のものと考えられている [佐々木 1985b: 8]。年代不明の半唐箕も、江戸時代末期の製造とされる [三輪 1989: 141]。

3-8.5. X 脚支持型

「設楽式半唐箕」として木下が報告した資料である。とおしつき唐箕と半唐箕には、とおしの有無を別にすれば、ともに通常の唐箕の改良ないしは簡略化の結果、成立した道具であろうとの推測ができるのであるが、「設楽式半唐箕」には、まったく違っ

た発想による成立事情があったのではないかと思われる。明治時代以前にさかのぼる資料の発見が希求される。

3-8,6. 支持型不明

西暦(和暦)	製造人名銘文	製造地名銘文	使用地(所蔵先)名	備考
1905 明治38			南会津郡田島町	F
1905 明治38			大沼郡金山町	F

これらはともに半唐箕を改造したものらしく、田島町の資料は酒造家で使用されていた [佐々木 1985b: 8]。

3-8,7. 分布の傾向

とおしつき唐箕の出現は、近畿地方の一部に限られており、いずれもその形態が脚柱支持型である。対するに、半唐箕は東北地方の一部に限られていて、その形態は横木支持型または縦木支持型であって、日本の東西における出現状況に顕著な差異がみられる。

文献上では、1723年の『農述鑑正記』にとおしつき唐箕が図入で紹介されている。そのことから、当時、大坂周辺で生産使用されていたことが推測されるのである。また、近年、姫路市が市内の旧家を対象に実施した古文書調査の過程で、1821年の銘がある「千石唐箕之圖」が発見された¹⁵⁾。「文政四歳辛巳九月十七日 堀川某圖之」の裏書きがあるその図に示されたものは、まさしくとおしつき唐箕の正面図であって、内部構造をも描いている。その構造は、脚柱支持型を呈し、現存する「京屋七兵衛」「杵屋松五郎」あるいは「源助」製のものとほとんどかわらない。同市による史料集の早急な刊行を期待する。

この図を所持していた旧家は、大庄屋クラスの豪農である。この図をもとに、同家が「千石唐箕」の製造に着手したのかどうかは不明だが、少なくとも当時、このような選別用具が存在し、摂津・播磨地方に普及をみようとしていたことは、確実となった。

ところで、とおしつき唐箕の呼称については、『農述鑑正記』が「唐箕 千石とをしの事也」と説明して「唐箕」と「千石とをし」を同一視している記述がある。「千石唐箕之圖」と同じ発想の命名と考えられる史料には、京屋治兵衛の発行した引き札

15) 増田重信氏の教示による。

もあり、「とうみ千石とをし」と記載されている。この引き札の発行年代は不明である [守山市史編纂委員会 1974: 509]。この部分は、従来は唐箕と千石とおしという2個の道具名の併記と解釈されてきたことであろう。しかし、「千石唐箕之圖」同様「とうみ千石とをし」が1個の道具であった可能性は高い。

4. ま と め

唐箕の形態分類は、製造技術の系統の識別に有効なものとしなければならない。その点で、私は東西差異の対比を主眼とする小坂の設定した分類指標の不備を指摘した。そして、それにかわる新たな分類指標として翼車軸支持方法の違いに着目し、これにもとづいて江戸・明治時代の紀年銘唐箕の形態を5つの形式に分類した。さらにそれぞれの翼車軸支持型のなかで、細分類をおこない、その結果、形態差異を識別することにより、地域的な出現傾向と製造人の系統が、解明し得ることを明らかにした。小坂の設定した分類指標によるのでは、このような作業はきわめて困難であったらう。

5形式の分類にもとづく分析の結果を要約すると、以下のとおりである。

4-1.1. 支柱支持型

この型の唐箕は、近畿・中国・四国・九州・中部地方に分布し、京屋系・準京屋系・熊本系の3系統が認められる。

近畿地方では、京屋系の唐箕の初出は、1767年である。現存する紀年銘唐箕としても、一番古いのが、製造人名がなく、京屋製の唐箕であるとは断定できない。製造人名の初出は、1808年の唐箕であるが、その人は「團屋八良兵衛」であって京屋ではない。京屋の名の初出は、1825年の「京屋小三郎」である。

京屋の名は、『農具便利論』に「京屋七兵衛」「京屋清兵衛」があらわれており、寛文年間(1661~1673)には大坂農人橋において活動していたとする。ただ、彼らが唐箕の製造をてがけたかどうかについては言及されていない。

中国地方にも京屋系に近似した形態を示す唐箕が若干分布している。四国地方の唐箕は、この型が一般的で、おおむね京屋系・準京屋系に属する形態を保持している。中部地方の場合は、美濃方面に京屋系の唐箕がある。「唐箕屋要助」は「岐阜市加和屋町」在住であるから、大坂仕込みで開業したものであろうか。

準京屋系の唐箕は、近畿地方では1832年の資料が初出である。京屋系の唐箕との系統の関係は、大坂を中心とした同心円構造であると考えられ、準京屋系の唐箕の製造

人は、同心円の外縁部にあらわれる。

1789年に初出する熊本系の唐箕は、九州地方に特徴的な形態である。

以上のことから、支柱支持型の唐箕は、大坂を中心に、東は中部地方の西部地域から西は九州地方にいたるひろい範囲に展開していたことが判明する。しかし、北近畿・山陰地方・関東ならびに東北地方方面には、展開しなかったようである。

4-1.2. 脚柱支持型

この型の唐箕は、近畿地方では、1886年「近藤佐十郎」製のとおしつき唐箕1点を見出すのみである。中部地方には、1910年「二木政太郎」製の唐箕がある。東北地方では山形県下に集中してみられ、1839年を初出とする。この型の唐箕は、とおしつき唐箕を除けば、現在のところ、石川県と山形県に見出されるのみである。

4-1.3. 横木支持型

この型の唐箕は、主として近畿地方の北部および西部と、中国地方東部一帯に展開していた。また、離れて東北地方にも出現する。

横木支持型は、二塚系の唐箕と出石系の唐箕に区分されるが、形態の類似は著しく、両者の関係にはかなり親密なものがあつたと推定される。

二塚系の唐箕は、近畿地方では1854年の「大道屋利兵衛」製が初出である。中国地方のものでは、1861年と、1861～3年にあたる「文久」年間の銘がある唐箕が二塚系である。

出石系の唐箕は、1855年の「藤簀屋忠作・同兵吉」製の唐箕が初出である。1911年の「上田達造」製の唐箕は、脚の配列に特徴があるほか、出石にあって二塚系の唐箕の形態を示していて、二塚系と出石系の唐箕の製造人の関係を考えるうえで注目される。ただ、その子孫からの聞き取りでは、上田氏は3代にわたり出石城下の指物師であつたといひ、二塚系の製造人との交渉は、まだ見出せない。1898年の「吉川屋平四郎」製唐箕も、「上田達造」製唐箕に酷似しているので、山陰地方の製造人との交流もあつたことが推測される。なお、中国地方においては、山陽側に支柱支持型の唐箕とともに横木支持型の二塚系の唐箕が流通していた。

中部地方には、新潟県の北部に1872年の唐箕があり、これは、起風胴部・選別胴部・漏斗部が一体のものとして構成されていて、全体の形状は横U字型を呈している。

東北地方には、横木支持型の唐箕が比較的多く、1809年と1857年の2点の唐箕が、二塚系の唐箕の起源を遡らせるものとなる可能性があり注目される。二塚にあって唐箕や家具類の製造に携わっていた満田氏一族の系譜は、過去帳により「大道屋」を屋

号とした初代伊右衛門が1818年に生まれたことが判明している。また、「本家」あるいは「山田屋」をなつたという忠右衛門は、初代が不明であるが、2代目とする者の身内に早世した者があり、その没年が1784年である [近藤 1984c: 6-7]。この時期に、すでに二塚において唐箕などの製造がおこなわれていたのであろうか。また、満田一族の東北地方との関係も、まだ明らかではない。

次に、とおしつき唐箕と半唐箕との関係が考察されなければならないが、ここに用いた翼車軸支持具を基準とする類型化によるかぎり、両者の間には、直接の影響関係が認められないように思われる。「久内」の製造にかかる半唐箕は、典型的には1872年の山古志村の唐箕に似て、その簡略化された形態のように思われる。

4-1.4. 縦木支持型

縦木支持型に該当する唐箕は、西日本では、九州に1897年の唐箕1点を見出すのみである。支柱支持型の熊本系の唐箕に対して、縦木支持型の熊本系の唐箕としたものである。しかし、甲山町や東和町でこの型の唐箕が製造使用されていた例もあり、今後の調査によって、中国地方西部や九州地方からさらに年代を遡る資料の出現する可能性はある。

中部地方には、東海地方を中心にこの型が展開している。1782年の銘があるとされた唐箕と1843年の唐箕は、全体の印象に、中国地方西部の一部にみられた唐箕と類似する点がある。これは、京屋の活動した大坂を中心とした場合、支柱支持型の唐箕に同心円状の形態変更の認められたことの延長上に位置づけられる現象であるかも知れない。一方では、関東地方にみられる漏斗部が分離可能な唐箕とも無縁ではない。

関東地方の唐箕は、いずれもこの型である。1839年の唐箕に背負うための処置が施されていたこと、1842年の唐箕に遠方から購入してきたことを伝えていることは、当時は唐箕の生産地に限られていたことを物語るものなのであろう。その産地のひとつが佐野市あたりにあったことを、伝承は教えてくれている。おそらく、このあたりが関東・東北地方に展開したこの型の唐箕の発祥地ではなかったか。

東北地方の唐箕にも、漏斗部が本体と一体となったものが、主として福島県を中心に分布していたが、これが北関東の生産地からの展開と考えることができるのである。北関東から発した唐箕は、一方では「上総唐箕」の原型として採用され、また一方では東北地方に展開していったものと思われる。関東・東北地方の唐箕の一系統は、1842年の唐箕が買い求められたと伝える佐野方面に、ひとまずその起源を求めてよいであろう。すると、「上総唐箕」の先行形態と認めてよいような形態の唐箕が、東北

地方の唐箕のなかに少なからず存在することとも符合する。そして、1808年「大工善八」銘の唐箕がすでにそのような形態上の類似を示していることを考慮するなら、関東地方において唐箕の製造が開始された時期が、ほぼ1800年より以前であったことが想像される。

4-1.5. X 脚支持型

木下が「設楽式半唐箕」と名づけたこの唐箕は、現在のところ、江戸・明治時代の年号を有する資料の存在が知られていない。その形態は、他の唐箕に較べてきわめて特異なものがあり、局地的な普及を示す。この型の唐箕が、いつごろ成立したのかという問題は、今後に残されている。

補足 唐箕製造人について

最後に、江戸・明治時代の紀年銘唐箕にあらわれた製造人に関する考察の必要があることに対して、若干の問題点を明らかにしておく。本来ならば、ここにあらわれた各地の製造人について、彼らがいかなる生産活動を展開していたか、技術交流の状況とあわせて明らかにする必要がある。製造人の追跡調査に関する報告には、近藤・大島・佐々木らによるものがあるが、なおじゅうぶんであるとはいえない。唐箕製造人の多くが、唐箕ばかりでなく、千石とおし・万石とおし、あるいは水車その他の農具類、さらには家具・建具類の製造にも関与していたことに留意しておかなければならない。私は、製造人の動向についても報告し、それにもとづいて解明すべき問題のあることを認めるものであるが、現存する各地の唐箕の調査をすすめるなかで、彼らが製造していた千石とおし・万石とおしの少なくないことを知った [近藤 1987b: 45-51]。それらの資料をも、唐箕と同様に分析する必要がある、製造人の系統をさぐるためにも、そのことがまず優先されなければならない。製造人に関する考察は、その後において実施すべき問題であると判断して、今後二期する所存である。

謝 辞

本稿をまとめるにあたっては、各地のご所蔵者ならびに博物館・資料館をはじめとする諸機関の担当職員の方々に、ひとかたならぬご協力とご厚意を賜った。資料を提供していただいた多くの方々のことも忘れられない。こうした方々すべてのお名前を記すことはできないが、誌上を借りて心よりお礼を申しあげる。わけても、木下忠先生、小坂広志先生、故河岡武春先生には、数々のご教示とご指導をいただいた。また、友枝啓泰先生、清水昭俊先生には、草稿の

段階で適切なご助言を賜った。ご厚情に厚く感謝の意を表したい。さらに、ここで取りあげた各地の紀年銘唐箕の所在の把握に関しては、財団法人日本常民文化研究所が実施した全国的な規模の紀年銘民具調査と、兵庫県立歴史博物館が実施した県内の農具調査の成果におうところが大きい。私は、どちらの調査にも関与する機会を得たが、両機関による調査の成果を多く利用させていただけたことは、非常に有益であった。これらの丹念な調査がなければ、おそらく、拙稿は成立し得なかったであろう。

紀年銘唐箕一覧 I 江戸時代

江戸時代の年号を有する唐箕は、現在54点が知られている。

呼称〔唐 箕〕 年号〔明和4, 5. /1767〕 所蔵〔京都府立総合資料館〕

製造〔 〕

出典〔小坂 1980: 114, 129, 143. 塩見・大塚 1989: 103。〕

使用〔京都府船井郡八木町西田南条 平井敬一郎〕

特記〔 〕

銘文〔明和四亥五月吉日〕

呼称〔トアオリ〕 年号〔天明², /1782?〕 所蔵〔日本民俗資料館・松本市立博物館〕

製造〔 〕

出典〔日本民俗資料館・松本市立博物館 1984: 10。〕

使用〔長野県松本市元町〕

特記〔銘文不明, 年号は同館目録記事および窪田雅之の教示〕

銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔寛政1. /1789〕 所蔵〔個人蔵〕

製造〔 〕

出典〔熊本日日新聞社編集局 1977: 341。〕

使用〔熊本県玉名郡長州町清源寺 竹本孝市〕

特記〔 〕

銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔文化5, 8. /1808〕 所蔵〔伊丹市立博物館〕

製造〔大阪府 三津屋^村通筋/車屋八良兵衛〕

出典〔日本常民文化研究所 1981: 11. 近藤 1989: 69-76。〕

使用〔兵庫県伊丹市大鹿 or 北村〕

特記〔「三津屋村」は、現淀川区三津屋〕

銘文〔文化五年辰八月吉日 三津屋^村通筋車屋八良兵衛 石^口^屋右^エ門所持〕

近藤 紀年銘唐箕の形態分類

呼称〔突き唐箕〕 年号〔文政9, 霜月／1826〕 所蔵〔五日市町郷土館〕
製造〔 県 小中野邑／高水金治良〕
出典〔町田市立博物館 1991: 10-13, 57.〕
使用〔東京都西多摩郡五日市町養沢 沖倉勝太郎〕
特記〔もと池谷家所蔵, 五人組に譲渡, 沖倉家はその一員だったという〕
銘文〔文政九丙戌歳霜月吉□作之 工手間拾参人 小中野邑大工高水金治良 イ 武列玉郡
養澤邑 本巢池谷氏〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔文政10, 1. /1827〕 所蔵〔堺市博物館〕
製造〔大阪府 住吉安立町□□□／山内□□兵衛〕
出典〔小谷 1981: 2.〕
使用〔大阪府〕
特記〔「住吉安立町」は, 現住之江区安立〕
銘文〔文政拾歳亥正月 住吉安立町□□□ 山内□□兵衛調之〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保3, 2. /1832〕 所蔵〔兵庫県立歴史博物館〕
製造〔兵庫県 加西郡□□／扇米風車屋惣八〕
出典〔近藤 1984c: 11. 兵庫県立歴史博物館 1991: 4.〕
使用〔兵庫県神崎郡福崎町田原 黒田宏〕
特記〔 〕
銘文〔天保三年たつ二月吉□ とらみや大工惣八 大極上無類飛切請合加西郡□□扇米風車
屋大工惣八乍工〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保3. /1832〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔 〕
出典〔鶴藤 1978: 53-54. 近藤 1984c: 1.〕
使用〔岡山県笠岡市吉田 鶴藤春能〕
特記〔1950,5,10. 修理〕
銘文〔天保参辰年製作 昭和廿五年拾月修理〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保5, 9. /1834〕 所蔵〔岡山県立青少年農林文化セ
ンター三徳園〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 25, 92-93.〕
使用〔岡山県岡山市一宮〕
特記〔 〕
銘文〔天保五年午九月吉日新調〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保5, 10. /1834〕 所蔵〔館岩村教育委員会〕
 製造〔京都府 天田郡直見村／井上龜藏〕
 出典〔佐々木 1985b: 4-12。佐々木 1989: 4-6。〕
 使用〔福島県南会津郡館岩村〕
 特記〔佐々木写真提供〕
 銘文〔天保五甲午歳十月作之 日本廻國廿一年終り 丹波國天田郡直見村 井上龜藏事信善
 光別當大願寺御弟子 法名善勇年四十五 妻智道トシ三十九〕

呼称〔半唐箕〕 年号〔天保8, 2. /1837〕 所蔵〔勸農村文化研究所附設置賜
 民俗資料館〕
 製造〔福島県 北田村／久内〕
 出典〔日本常民文化研究所 1981: 7, 90-91。〕
 使用〔山形県米沢市〕
 特記〔 〕
 銘文〔天保八酉歳二月吉辰 清野氏 (焼印) 会津北田村久内〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保9, 8. /1838〕 所蔵〔西宮市立郷土資料館〕
 製造〔 〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 8。〕
 使用〔兵庫県西宮市越木岩町 横山進〕
 特記〔 〕
 銘文〔天保九年戌八月〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保10. /1839〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 〕
 出典〔野口 1986: 5。〕
 使用〔山形県山形市陣場 岩田昭男〕
 特記〔一覽表揭示し銘文略〕
 銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保10. /1839〕 所蔵〔青梅市郷土博物館〕
 製造〔 〕
 出典〔町田市立博物館 1991: 16-17, 57。〕
 使用〔東京都青梅市長湊 並木宇三郎〕
 特記〔背負って運ぶための板が張ってあった, 肩に担うための縄が一部残る〕
 銘文〔天保十□月吉日〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保13, 5. /1842〕 所蔵〔秩父市立民俗博物館〕
 製造〔栃木県 佐野市／ 〕
 出典〔日本常民文化研究所 1980: 17, 90-91。小坂 1980: 115, 143。〕
 使用〔埼玉県秩父市黒谷 辺見眸〕
 特記〔日光見物の帰路佐野で購入し背負ってきたと伝える〕
 銘文〔天保十三寅年五月吉日〕

近藤 紀年銘唐箕の形態分類

呼称〔ト ミ〕 年号〔天保14, 2. /1843〕 所蔵〔明方村立歴史民俗資料館〕
製造〔岐阜県 寒水村／治□〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 60, 90-91。小坂 1980: 115, 144。〕
使用〔岐阜県郡上郡明方村寒水 小椋良知〕
特記〔 〕
銘文〔天保十四癸卯年二月 寒水村 大工治□ 此主喜□〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保15, 10. /1844〕 所蔵〔中山町立歴史民俗資料館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 70。小坂 1980: 115, 133, 144。野口 1986: 5。〕
使用〔山形県東村山郡中山町長崎 志村八良〕
特記〔 〕
銘文〔天保十五年辰十月吉日〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔天保15. /1844〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
製造〔香川県 松嶋今橋／關田屋〕
出典〔六車功教示〕
使用〔香川県綾歌郡綾南町陶 細谷清〕
特記〔二度ほどの補修あり、銘は「藤田屋」または「紀田屋」か〕
銘文〔天保十五辰 松嶋今橋 關田屋 細谷 大極上〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔嘉永1. /1848〕 所蔵〔西宮市立郷土資料館〕
製造〔兵庫県 印南郡國包□／車屋□之輔〕
出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 9。〕
使用〔兵庫県西宮市塩瀬町名塩 亥野彊〕
特記〔 〕
銘文〔作時嘉永元申年□□□□南郡國包□…大極上壹番無類請合播芴印南郡國□□車屋□之輔作製 摩恵〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔嘉永3. /1850〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔 県 横沢村／太代治〕
出典〔佐々木 1981: 101。〕
使用〔福島県郡山市湖南町館 渡辺〕
特記〔 〕
銘文〔一、式百文割物拾本 八拾文 板式間 一、百三拾くぎ壱己 半一、金式朱 白米五升 作料 横沢村 大工太代治 / 壱貫九百拾文 渡辺参右衛門〕

呼称〔唐箕ノウケ〕年号〔嘉永3, 9, 16. /1850〕 所蔵〔西宮市立郷土資料館〕
 製造〔兵庫県 播州尼□□東大寺筋/巧工佐七〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 10。〕
 使用〔兵庫県西宮市甲子園口 小西久嘉〕
 特記〔漏斗部（トウミノウケ）のみ現存〕
 銘文〔□時嘉永三歳庚戌九月十六日 小西久四郎持所之 播州尼□□東大寺筋 細工人巧工
 佐七〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔嘉永6, 9. /1853〕 所蔵〔奥会津地方歴史民俗資料館〕
 製造〔 〕
 出典〔小坂 1980: 115, 134, 144. 佐々木 1989: 4。〕
 使用〔福島県南会津郡田島町折橋 星清〕
 特記〔佐々木は「嘉永六年丑九月吉日 寿折橋村星□右衛門」と報告〕
 銘文〔嘉永六歳丑九月吉日 折橋村 星□□〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔嘉永6. /1853〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 〕
 出典〔野口 1986: 5。〕
 使用〔山形県上山市金生 大沢新一〕
 特記〔一覧表揭示し銘文略〕
 銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔嘉永7, 4. /1854〕 所蔵〔神戸市農政局〕
 製造〔兵庫県 二塚村/大道屋利兵衛〕
 出典〔和田 1974: 27。〕
 使用〔兵庫県神戸市北区八多町柳谷 下浦英明〕
 特記〔 〕
 銘文〔嘉永七甲寅四月日 播州竜野在二塚村 大道屋利兵衛作之〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔嘉永7. /1854〕 所蔵〔宮崎県立総合博物館〕
 製造〔 〕
 出典〔泉 1980: 146-147。〕
 使用〔宮崎県西臼杵郡高千穂町田原 佐藤和子〕
 特記〔年号等判読不可〕
 銘文〔火の用心…〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔安政2, 9. /1855〕 所蔵〔京都府立総合資料館〕
 製造〔兵庫県 出石新町/藤箕屋忠治・兵吉〕
 出典〔小坂 1980: 115, 135, 144. 塩見・大塚 1989: 103。〕
 使用〔京都府福知山市甘栗 芦田勇喜〕
 特記〔 〕
 銘文〔安政二年卯九月仕立 大工 但馬出石新町 藤箕屋忠治 同兵吉〕

近藤 紀年銘唐箕の形態分類

- 呼称〔唐 箕〕 年号〔安政 3. /1856〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔 〕
出典〔野口 1986: 5。〕
使用〔山形県東村山郡中山町向新田 細谷鶴松〕
特記〔一覧表揭示し銘文略〕
銘文〔 〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔安政 3, 10. /1856〕 所蔵〔バルテノン多摩〕
製造〔 県 /保九良〕
出典〔町田市立博物館 1991: 18-21, 57。〕
使用〔東京都多摩市一の宮 太田伊三郎〕
特記〔 〕
銘文〔安政三辰年十月吉日 大工保九良造之 太田氏需之 安政三年辰十月吉日 大田氏需之 ……〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔安政 4, 5, 3. /1857〕 所蔵〔群馬県立歴史博物館〕
製造〔 〕
出典〔小山 1981: 111-115。〕
使用〔群馬県渋川市南牧 砥柄友市〕
特記〔銘文年号は購入時〕
銘文〔安政四丁巳年壬五月三日〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔安政 4. /1857〕 所蔵〔山形県立博物館〕
製造〔 〕
出典〔野口 1986: 5。〕
使用〔山形県西村山郡西川町岩根沢 岩本昇〕
特記〔一覧表揭示し銘文略〕
銘文〔 〕
- 呼称〔アブチ〕 年号〔安政 5. /1858〕 所蔵〔名古屋市博物館〕
製造〔 〕
出典〔名古屋市博物館 1982: 715の1。〕
使用〔愛知県稲沢市 杉山一弘〕
特記〔銘文紹介記事なし〕
銘文〔 〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔安政 5, 8, 1. /1858〕 所蔵〔日立市郷土博物館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 11, 90-91。小坂 1980: 115, 145。〕
使用〔茨城県日立市下深萩町 藤本照〕
特記〔 〕
銘文〔安政五年八月一日 藤本氏〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔安政6, 8. /1859〕 所蔵〔奥会津地方歴史民俗資料館〕
 製造〔 〕
 出典〔小坂 1980: 115, 136, 145. 佐々木 1989: 4.〕
 使用〔福島県南会津郡田島町糸沢 龍福寺〕
 特記〔 〕
 銘文〔安政六未年八月吉日 熊寺 龍福寺英教求之〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔安政6, 秋. /1859〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
 製造〔 県 御林前通筋／松蔵〕
 出典〔六車功教示〕
 使用〔香川県綾歌郡綾上町西分 南春次〕
 特記〔 〕
 銘文〔安政六年未秋 極上請合 御林前通筋 松蔵 大極上請合〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔安政6, 10. /1859〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 〕
 出典〔熊本日日新聞社編集局 1977: 341-342.〕
 使用〔熊本県山鹿市石 吉村実〕
 特記〔もと中雨屋所有の中古品を購入〕
 銘文〔安政六己未十月吉日中 中雨屋 大正四年卯月求 吉村利一〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔安政6. /1859〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 〕
 出典〔野口 1986: 5.〕
 使用〔山形県山形市高原町 大宮セツ〕
 特記〔一覧表揭示し銘文略〕
 銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔文久1, 8. /1861〕 所蔵〔奈良県立民俗博物館〕
 製造〔大阪府 大阪農人橋式丁目／京屋清兵衛〕
 出典〔小坂 1980: 115-116, 145. 日本常民文化研究所 1981: 14.〕
 使用〔奈良県磯城郡川西町下永 or 久保 吉本貞一〕
 特記〔「左兵衛」ではなく「庄兵衛」か〕
 銘文〔文久元歳酉八月吉日 大阪農人橋式丁目 京屋清兵衛 保田村^因兵衛所持〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔文久1, 10. /1861〕 所蔵〔高梁市郷土資料館〕
 製造〔 〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔岡山県（高梁市方谷） 長瀬塾〕
 特記〔 〕
 銘文〔文久元年十月調之 長瀬 山田氏〕

近藤 紀年銘唐箕の形態分類

- 呼称〔唐 箕〕 年号〔文久3, □. /1863〕 所蔵〔赤花郷土資料館〕
製造〔兵庫県 出石新町/澤困豊治〕
出典〔近藤 1984c: 1-12。〕
使用〔兵庫県出石郡但東町赤花 橋本重幸〕
特記〔1870年の唐箕に「澤木忠次」の製造人名あり〕
銘文〔文久三亥年□月製之 大工 出石新町 澤困豊治 同所 平右衛門〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔文久3, 7. /1863〕 所蔵〔川崎市立日本民家園〕
製造〔 〕
出典〔小坂 1978a: 67-68, 同 1980: 116, 137, 145。〕
使用〔茨城県笠間市片庭 太田守彦〕
特記〔 〕
銘文〔文久三亥七月吉日〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔文久3. /1863〕 所蔵〔和歌山市立博物館〕
製造〔 〕
出典〔近藤調査〕
使用〔 〕
特記〔 〕
銘文〔文久三年求之 □ 大極上 □□氏 戀久□〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔文久□, 3. /1861~3〕 所蔵〔早島町立歴史民俗資料館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 25, 92-93。〕
使用〔岡山県都窪郡早島町金田〕
特記〔 〕
銘文〔文久紀元□□春三月吉日〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔慶応1. 12. 2. /1865〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔 県 /竹市式〕
出典〔徳山村教育委員会 1987a: 125, 同 1987b: 図181-182。〕
使用〔岐阜県揖斐郡徳山村塚〕
特記〔1952年資料に竹市式あり故に本資料は後世改良〕
銘文〔慶応元年十二月二日（把手金具陽刻）竹市式〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔慶応2, 1. /1866〕 所蔵〔栃木県立博物館〕
製造〔 県 /（関塚太郎）〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 12. 小坂 1980: 116, 146。〕
使用〔栃木県安蘇郡葛生町牧 関野茂〕
特記〔関塚太郎は製造人か使用者か不明〕
銘文〔丁時慶応二丙寅正月吉日 関塚太郎□ 右…慶応二丙寅正月吉日 余関塚…〕

- 呼称〔唐 箕〕 年号〔慶応2. /1866〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔福島県 /北田久内〕
 出典〔佐々木 1985b: 4-5。〕
 使用〔福島県耶麻郡猪苗代町楊枝〕
 特記〔久内の活動した北田村は現在の河沼郡湯川村北田〕
 銘文〔 〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔慶応3, 8. /1867〕 所蔵〔奥会津地方歴史民俗資料館〕
 製造〔 県 岩本村/渡部伝之丞〕
 出典〔小坂 1980: 116, 146。佐々木 1989: 4。〕
 使用〔福島県南会津郡田島町永田 大橋幸太郎〕
 特記〔佐々木は「卯五月吉日」と報告〕
 銘文〔慶応丁三年卯八月吉日 岩本村 糖箕師渡部伝之丞〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔慶応3, 8. /1867〕 所蔵〔日の出町教育委員会〕
 製造〔 〕
 出典〔町田市立博物館 1991: 22-25, 57-58。〕
 使用〔東京都西多摩郡日の出町平井 山崎治信〕
 特記〔起風胴部が八角形, 漏斗部欠失〕
 銘文〔慶応三年卯八月求之 西上 慶応三年卯八月求之 武列多摩郡 中平井村 □断入□
 上〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔慶応3. /1867〕 所蔵〔和歌山市立博物館〕
 製造〔和歌山県 若山中埜島北ノ丁/京屋猪之助〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔和歌山県〕
 特記〔 〕
 銘文〔慶応三卯年 □□網 源治郎 □□ 請合 麻 若山中埜島北ノ丁大坂^四…京屋猪
 之助 (花押) 中埜島北ノ丁大坂□屋猪之助〕

紀年銘唐箕一覽Ⅱ 明治時代

明治時代の年号墨書を有する唐箕は、現在のところ、以下の71点が知られる。

- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治3, ³, /1870〕 所蔵〔京都府立丹後郷土資料館〕
 製造〔兵庫県 出石新早/澤木忠次〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔京都府舞鶴市西方寺 上野弥一郎〕
 特記〔 〕
 銘文〔豈明治参歳戊午朱明^四天吉辰 但州出石新早 大工澤木忠次作之〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治 5, 4. /1872〕 所蔵〔加古川市立郷土資料館〕
製造〔兵庫県 印南郡加古川／扇□車屋重兵衛〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 12。〕
使用〔兵庫県高砂市米田町 松本宏〕
特記〔 〕
銘文〔小時明次五申四月中句 加古川 とうみや重兵衛□ 大極上巻番無類請合 印南郡
加古川 扇□車屋重兵衛造立〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治 5, 10, 18. /1872〕 所蔵〔山古志村民俗資料館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 45, 90。小坂 1980: 116。〕
使用〔新潟県古志郡山古志村虫尾 長島源七〕
特記〔(一般に) 大正時代に改良されてザグリがつき使用が容易になった〕
銘文〔明治五年十月十八日新調〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治 6, 8. /1873〕 所蔵〔八尾市立歴史民俗資料館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋貳丁目／京屋清兵衛〕
出典〔立石 1991: 46, 52。〕
使用〔大阪府八尾市山畑 岩本吉治〕
特記〔 〕
銘文〔明治六癸酉八月調之東岩本所有 大坂農人橋貳□□京屋清兵衛 大坂根元農人橋貳丁
目京屋清兵衛 □時明治六癸酉八月吉日調之東岩本氏 大極上前〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治 7, 8, 11. /1874〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
製造〔香川県 平井町／赤井農具製作所〕
出典〔六車功教示〕
使用〔 県 頼富一実〕
特記〔 〕
銘文〔明治七年甲戌八月十一日… 極上請合 大改良赤井式唐箕 新安特許第36330号 第
42652号 第55358号 第37875号 製作発売元香川県平井町 赤井農具製作所〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治 7, 9. /1874〕 所蔵〔神戸深江生活文化史料館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋貳丁目／京屋治兵衛〕
出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 6-7。〕
使用〔兵庫県芦屋市西蔵町 佐久間一〕
特記〔 〕
銘文〔明治七年甲戌九月 大坂農人橋貳□□屋治兵衛 (焼印) 大坂農人橋二丁目京屋治
兵衛〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治7, 10. /1874〕 所蔵〔久井町立歴史民俗資料館〕
 製造〔広島県 豊田郡野良村／水戸仙助〕
 出典〔日本常民文化研究所 1980: 27, 92-93。〕
 使用〔広島県御調郡久井町羽倉 河城二六〕
 特記〔1922年, 神田村貞谷茂一改造「改良唐箕米粒輩出加減機」を取付〕
 銘文〔明治七年申戊十月出 豊田郡野良村水戸仙助 豊田郡□村水戸仙助謹製〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治8. /1875〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔福島県 /北田久内〕
 出典〔佐々木 1985b: 5。〕
 使用〔福島県耶麻郡西会津町打越〕
 特記〔銘文紹介記事なし〕
 銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治9, 10. /1876〕 所蔵〔養父町教育委員会〕
 製造〔 〕
 出典〔日本常民文化研究所 1981: 13, 92-93。〕
 使用〔兵庫県養父郡養父町小城 長島善右衛門〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治九年十月新調 小城本長島 明治九□年十月新調 小城本長島〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治10, 10. /1877〕 所蔵〔東京農業大学図書館〕
 製造〔 〕
 出典〔小坂 1980: 116, 138, 146。〕
 使用〔埼玉県加須市樋遣川 清水貞伊〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治十年□□丑十月〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治11, 10. /1878〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
 製造〔 県 /柳屋利平〕
 出典〔六車功教示〕
 使用〔香川県大川郡引田町 佐藤豊三郎〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治十尅歳寅 / 年十月吉日 柳屋利平〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治11. /1878〕 所蔵〔永富家住宅〕
 製造〔兵庫県 二塚村／隠居屋〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 17-18。〕
 使用〔兵庫県揖保郡揖保川町 永富家〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治十一年…寅…西永富 二塚村本家隠居屋作之〕

近藤 紀年銘唐箕の形態分類

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治13. /1880〕 所蔵〔八尾市立歴史民俗資料館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋貳丁目／京屋七兵衛〕
出典〔立石 1991: 52。〕
使用〔大阪府八尾市亀井 田中繁夫〕
特記〔 〕
銘文〔明治十三年 大坂農人橋貳丁目日本家京屋七兵衛 大極上前巻番〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治14. /1881〕 所蔵〔岡山県立青少年農林文化センター三徳園〕

製造〔 県 /赤松又郎〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 25。〕
使用〔岡山県備前市香登本 柴部武士〕
特記〔 〕
銘文〔明治十四巳歳 唐箕名□仕入 大工赤松又郎〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治14, 7. /1881〕 所蔵〔加悦町伝習センター〕
製造〔兵庫県 出石… / 〕
出典〔近藤調査〕
使用〔京都府与謝郡加悦町加悦奥 松本ます枝〕
特記〔 〕
銘文〔明治十四年巳七月…但馬出石…〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治15, 10. /1882?〕 所蔵〔上夜久野町資料館〕
製造〔兵庫県 出石材木町／林栄蔵〕
出典〔近藤調査〕
使用〔京都府 (丹後地方)〕
特記〔 〕
銘文〔明治拾伍年 年十月仕立 大工 但馬国出石材木町 林栄蔵〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治17. /1884〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
製造〔香川県 松嶋今橋筋／豊嶋屋嘉兵衛〕
出典〔六車功教示〕
使用〔香川県高松市亀水町弓弦羽 南原春次〕
特記〔 〕
銘文〔明治十七年申稔 無類極上請合 松嶋今橋筋 豊嶋屋嘉兵衛〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治17頃/1884頃〕 所蔵〔小谷城郷土館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋貳丁目／京屋太兵衛〕
出典〔小谷 1981: 口絵1-3。〕
使用〔大阪府堺市豊田 小谷方明〕
特記〔明治17年頃入手と小谷談話〕
銘文〔大坂農人橋貳丁目 京屋太兵衛 大極上 前 (焼印) 大坂本家 農人橋貳丁目 京屋太兵衛〕

- 呼称〔半唐箕〕 年号〔明治18. /1885〕 所蔵〔河東民俗館〕
 製造〔福島県 /北田久内〕
 出典〔佐々木 1985b: 6.〕
 使用〔福島県河沼郡河東町〕
 特記〔銘文紹介記事なし〕
 銘文〔 〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治19, 3./1886〕 所蔵〔三木家〕
 製造〔 県 /近藤佐十郎〕
 出典〔近藤 1984a: 17-23. 同 1984b: 1-4.〕
 使用〔兵庫県神崎郡福崎町辻川 三木美子〕
 特記〔とおしつき唐箕〕
 銘文〔明治十九年三月作之 大工近藤佐十郎 本三木氏用〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治20, 6. /1887〕 所蔵〔福知山市文化史料館〕
 製造〔兵庫県 出石材木町/林源六万吉〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔京都府福知山市上野条 佐竹篔〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治二十年亥六月吉日 但馬国出石材木町 大工林源六作之 万吉〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治20, 6. /1887〕 所蔵〔河内長野市立郷土資料館〕
 製造〔大阪府 住吉安立町九丁目/唐箕屋亦吉郎〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔大阪府河内長野市長野町 吉年勤〕
 特記〔「住吉安立町」は、現住之江区安立〕
 銘文〔明治貳拾年六月購求 吉年用具 住吉安立町□…唐箕屋亦吉郎 住吉安立町九丁目
 唐箕屋亦吉郎 本家根元 大極上 前〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治20, 10. /1887〕 所蔵〔奈良県立民俗博物館〕
 製造〔奈良県 寺垣内村/勝田栄吉〕
 出典〔小坂 1980: 116.〕
 使用〔奈良県吉野郡下北山村寺垣内〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治二十年十月 寺垣内村 勝田栄吉造 □橋本□子 橋本太郎…〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治21, 4. /1888〕 所蔵〔枚方市文化財調査会〕
 製造〔 県 /風車製造所金…〕
 出典〔日本常民文化研究所 1981: 9, 92-93.〕
 使用〔大阪府枚方市出口〕
 特記〔銘文は近藤調査により補遺〕
 銘文〔明治二十一年子四月上旬新調之 出口村阪下姓所持 風車製造所金… 大極上巻番〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治21, 4. /1888〕 所蔵〔淡路町郷土資料室〕
製造〔兵庫県 …大谷村/中家清蔵〕
出典〔近藤調査〕
使用〔兵庫県津名郡淡路町〕
特記〔 〕
銘文〔明治貳拾壹年四月吉日改 大極上仕出…大谷村中家清蔵〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治21, 7, 25. /1888〕 所蔵〔相川町郷土博物館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 46. 小坂 1980: 116.〕
使用〔新潟県佐渡郡相川町大浦 中川清〕
特記〔 〕
銘文〔明治二十一年七月廿五日 持主中川清吉 代価金壹円三拾銭〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治21, 10. /1888〕 所蔵〔岩国市立岩国教材資料館〕
製造〔山口県 御庄村山里/菊三郎〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 36.〕
使用〔山口県岩国市中津 松田音蔵〕
特記〔「御庄村」は、現在の岩国市〕
銘文〔戊明治廿壹年子十月新調 中津村 松田音蔵 代金貳円 御庄村山里菊三郎作〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治21. /1888〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔福島県 /北田平造〕
出典〔佐々木 1985b: 7.〕
使用〔福島県郡市湖南町三沢〕
特記〔北田平造の姓は白岩〕
銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治22, 1. /1889〕 所蔵〔大阪市立博物館〕
製造〔奈良県 和州添上郡なら村/唐箕萬白井式〕
出典〔近藤調査〕
使用〔 〕
特記〔 〕
銘文〔明治廿二辰年一月吉日 大和添上郡… (焼印) 元祖大和添上郡なら村唐箕萬 専売
特許貳〇〇九号 白井式唐箕 大和 河内 製造販売元協坂商店 … 耳成山〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治22, 9. /1889〕 所蔵〔海の博物館〕
製造〔 県 /原田式〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 3.〕
使用〔三重県鳥羽市本浦 中山米輔〕
特記〔 〕
銘文〔明治貳十貳年九月 原田式改良ス〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治23, 10. /1890〕 所蔵〔兵庫県立歴史博物館〕
 製造〔兵庫県 佐方村／富屋良三郎〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 4。〕
 使用〔兵庫県相生市 西脇寛〕
 特記〔「佐方村」は、現相生市佐方〕
 銘文〔明治貳拾三年寅ノ節十月月上旬新調 赤穂郡若狹野□野々村 西脇作治郎所有 買求定
 價金貳円 佐方村 富屋良三郎作之 前〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治24, /1891〕 所蔵〔群馬県立歴史博物館〕
 製造〔 〕
 出典〔小山 1981: 113, 188。〕
 使用〔群馬県〕
 特記〔銘文紹介記事なし〕
 銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治24, /1891〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 〕
 出典〔木下 1990: 7. 峯村 1990: 84。〕
 使用〔愛知県北設楽郡豊根村三沢 山本隆明〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治貳拾四年八月吉日〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治24, 11. /1891〕 所蔵〔上夜久野町資料館〕
 製造〔 県 /小田仙治郎〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔京都府天田郡夜久野町小倉 土井紀義〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治廿四年卯無神門作之 製造職工 小田仙治郎 極上等〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治26, 10. /1893〕 所蔵〔小野市教育委員会〕
 製造〔兵庫県 七美郡村岡町／野村徳蔵〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 15。〕
 使用〔兵庫県小野市〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治二十六年癸巳十月新調 細工人但馬国七美郡村岡町 野村徳蔵作〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治26, 11. /1893〕 所蔵〔上夜久野町資料館〕
 製造〔兵庫県 出石材木町／□園因〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔京都府〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治廿六年十一月 出石材木町 大工□園因 新案特許大正式唐箕 □記 発売元
 京都府相楽郡泊田 今農具□会 □口座大阪424□ 朝来郡美名瀬野工作人木村〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治27. /1894〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕
製造〔香川県 松嶋今橋筋／豊嶋屋嘉兵衛〕
出典〔六車功教示〕
使用〔香川県大川郡長尾町前山 金藤憲之〕
特記〔同館蔵1874年銘唐箕と同記事のプレートを取付〕
銘文〔明治貳七年…請合 松嶋今橋筋 豊嶋屋嘉兵衛 大改良赤井式唐箕 製作発売元 香
川県平井町 赤井農具製作所〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治27, 旧11. /1894〕 所蔵〔岩手県立農業博物館〕
製造〔岩手県 雫石／上野〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 6, 90-91。小坂 1980: 116。〕
使用〔岩手県盛岡市 竹鼻邦男〕
特記〔 〕
銘文〔明治廿七年旧十一月吉日拵之 大工雫石上野 代金弍円五拾銭也 (焼印) 竹善〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治28. /1895〕 所蔵〔三木文庫〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 38。〕
使用〔徳島県板野郡大山村榎之本 佐藤麻一〕
特記〔「榎之本」は「権之本」か?〕
銘文〔 〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治28, 8. /1895〕 所蔵〔枚方市文化財調査会〕
製造〔大阪府 河内交野郡私部／…屋弥右門〕
出典〔近藤調査〕
使用〔大阪府枚方市交野〕
特記〔 〕
銘文〔明治貳十八年八月新調 共同所有… 交野郡… … 大字… 河内交野郡私部…屋弥
右門 私部機細工所大寅〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治28, 9. /1895〕 所蔵〔川崎市立日本民家園〕
製造〔 〕
出典〔小坂 1978a: 69。同1980: 116-117, 139, 146。〕
使用〔神奈川県川崎市川崎区四谷上町 布川福之助〕
特記〔 〕
銘文〔明治廿八年九月吉辰求之 四や 柏や 大師磧村字四ツ家 柏屋伊之助〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治29, 5. /1896〕 所蔵〔茨城県歴史館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 92-93。小坂 1980: 117。〕
使用〔茨城県水戸市元吉田町 寺門徹〕
特記〔銘文疑義・常民1980:92の記事に「明治卅九年」とあり、誤植か?〕
銘文〔明治廿九年五月吉日 寺門氏 吉澤村〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治29, 8. /1896〕 所蔵〔北淡町歴史民俗資料館〕
 製造〔兵庫県 北淡町斗ノ内／中井兵吉〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 21。〕
 使用〔兵庫県津名郡北淡町浅野南 山口利正〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治二九年八月新調 …大工北淡町斗ノ内中井兵吉〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治30, 旧5. /1897〕 所蔵〔本渡市歴史民俗資料館〕
 製造〔 県 / (山口初治)〕
 出典〔日本常民文化研究所 1981: 53, 92-93。〕
 使用〔熊本県本渡市楠浦町 吉田惣太郎〕
 特記〔「山口初治」は、製造人名か使用者名か不明〕
 銘文〔明治三十拾年旧五月 山口初治 吉田惣太郎〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治31, 3, 25. /1898〕 所蔵〔鳥取県立博物館〕
 製造〔鳥取県 鳥取市瓦町／吉川屋平四郎〕
 出典〔日本常民文化研究所 1981: 18。〕
 使用〔鳥取県東伯郡大栄町由良 藤竹忠夫〕
 特記〔褒状2枚貼付（明治29, 31年付）〕
 銘文〔吉川屋平四郎作 御蔵仕立請合所本藤屋（褒状写）唐箕萬石 鳥取県鳥取市瓦町
 吉川屋平四郎 褒状 第貳回鳥取市生産物品評会審査長の推告ニ抛リ之ヲ授与ス 明
 治卅一年三月二五日（鳥取市長名）〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治32, 6. /1899〕 所蔵〔小野市教育委員会〕
 製造〔 〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 16。〕
 使用〔兵庫県小野市〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治卅二亥年六月…作〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治32, 6. /1899〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 県 / 建部式〕
 出典〔徳山村教育委員会 1987a: 125。〕
 使用〔岐阜県揖斐郡徳山村本郷〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治卅二年 亥六月吉日 岐阜県下山県郡高富天王嵐鳳屋英治（把手銘）□用新案
 願四七二六九 建部式〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治32, 10. /1899〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔兵庫県 印南郡國…/…や弥吉〕
出典〔松井良祐教示〕
使用〔兵庫県神戸市西区岩岡町 若林〕
特記〔松井写真提供〕
銘文〔明治三十三年十月上□ 印南郡國…や弥吉〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治33, 9. /1900〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔岐阜県 岐阜市加和屋町/唐箕屋要助〕
出典〔徳山村教育委員会 1987a: 125. 同 1987b: 図183-184.〕
使用〔岐阜県揖斐郡徳山村本郷〕
特記〔 〕
銘文〔明治三十三年九月作 岐阜市加和屋町 唐箕屋要助〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治35. /1902〕 所蔵〔京都府立総合資料館〕
製造〔京都府 乙訓郡寺戸/長谷川清右衛門〕
出典〔塩見・大塚 1989: 103.〕
使用〔京都府長岡京市神足〕
特記〔「乙訓郡寺戸」は、現城陽市寺戸〕
銘文〔明治三十五年 拾月新調之 山城國乙訓郡寺戸 長谷川清右衛門 新神足村字古市五十
十棲馬太郎 所有 大極上 請合 前〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治36, 5. /1903〕 所蔵〔海の博物館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 2.〕
使用〔三重県鳥羽市岩倉町 大山泰生〕
特記〔 〕
銘文〔明治三十六年五月〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治36, 6. /1903〕 所蔵〔八尾市立歴史民俗資料館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋二丁目/京屋七兵衛〕
出典〔立石 1991: 52.〕
使用〔大阪府八尾市 前田〕
特記〔 〕
銘文〔明治三十六年六月求之前田所持 大坂農人橋二丁目本家京屋七兵衛 大坂農人橋二丁
目本家京屋七兵衛 大極上〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治38. /1905〕 所蔵〔奥会津地方歴史民俗資料館〕
製造〔 〕

出典〔佐々木 1985b: 8, 同 1989: 4-5。〕

使用〔福島県南会津郡田島町〕

特記〔半唐箕を改造し樋口1口を取りつけた模様〕

銘文〔明治三拾八年拾月吉辰 終繕仕 水車常番 大竹市郎 三酒店用器 扱引は身らくで
心は古わい古の古 何百はの百もで左れ者 ほかに須るほどつらきものはなし〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治38, 1. /1905〕 所蔵〔大阪市立博物館〕

製造〔 県 淀川西岸桂本/…衛〕

出典〔近藤調査〕

使用〔 〕

特記〔「淀川西岸桂本」は、現高槻市桂本。「交野村私部」は、現交野市私部〕

銘文〔明治三十八年正月…淀川西岸桂本… …衛造之 (焼印) 北河内郡交野村私部 新案
特許 大正□唐箕 特約販売店谷林寅□〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治38, 穰. /1905〕 所蔵〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕

製造〔香川県 松嶋今橋筋/豊嶋屋嘉兵衛〕

出典〔六車功教示〕

使用〔香川県〕

特記〔 〕

銘文〔明治三拾八年巳穰 無類極上請合 松嶋今橋筋 豊嶋屋嘉兵衛〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治38. /1905〕 所蔵〔和歌山市立博物館〕

製造〔 〕

出典〔近藤調査〕

使用〔和歌山県〕

特記〔 〕

銘文〔明治38年…〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治38, 11, 2. /1905〕 所蔵〔舞坂町歴史民俗資料館〕

製造〔 〕

出典〔藤塚悦司教示〕

使用〔静岡県浜名郡舞坂町〕

特記〔藤塚写真提供〕

銘文〔明治卅八年拾壹月二日是求 明治三十八年十一月二日是ヲ求ム 舞坂町 伊藤園右衛
門〕

- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治38. /1905〕 所蔵〔弥平民具館〕
製造〔福島県〕
出典〔佐々木 1985b: 8.〕
使用〔福島県大沼郡金山町玉梨（但し館の所在地）〕
特記〔銘文記事紹介なし 樋口1口の唐箕〕
銘文〔 〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治39, □, 1. /1906〕 所蔵〔埼玉県立博物館〕
製造〔 〕
出典〔小坂 1980: 117.〕
使用〔 〕
特記〔 〕
銘文〔明治参拾九年□月一日 …〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治39, 11. /1906〕 所蔵〔青垣町歴史民俗資料館〕
製造〔兵庫県（佐治村） /（佐々木鶴吉）〕
出典〔日本常民文化研究所 1981: 11.〕
使用〔兵庫県氷上郡青垣町〕
特記〔「佐々木鶴吉」は、製造人名か使用者名か不明〕
銘文〔明治三十九年十一月 佐治村 佐々木鶴吉〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治40. /1907〕 所蔵〔相川町郷土博物館〕
製造〔 〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 46. 小坂 1980: 117.〕
使用〔新潟県佐渡郡相川町入川 近藤ソヨ〕
特記〔 〕
銘文〔明治四十年造り〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治40. /1907〕 所蔵〔八尾市立歴史民俗資料館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋詰 / 京屋太兵衛〕
出典〔立石 1991: 52.〕
使用〔大阪府八尾市 馬谷伊之松〕
特記〔 〕
銘文〔明治四十□ 大坂農人□□ 一番 馬谷伊之松（焼印） 大坂本家農人橋詰京屋太兵衛〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔明治41, 9. /1908〕 所蔵〔沼津市歴史民俗資料館〕
製造〔 県 吉原町寺町 / 野村岩右エ門〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 65, 92-93. 小坂 1980: 117.〕
使用〔静岡県沼津市原 飯田伍作〕
特記〔 〕
銘文〔明治四十一年九月求之 駿東郡原田原 貳百五拾九番地 高藤忠助用品 精撰請合製造人 吉原町寺町 野村岩右エ門〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治41, 11. /1908〕 所蔵〔東大阪市教育委員会〕
 製造〔大阪府 大坂農人橋東詰／京屋太兵衛〕
 出典〔芳井 1981: 15.〕
 使用〔大阪府東大阪市〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治四十一年十一月 大坂農人橋東詰 京屋太兵衛〕

呼称〔ト ミ〕 年号〔明治42, 1. /1909〕 所蔵〔明方村立歴史民俗資料館〕
 製造〔岐阜県 郡上八幡赤谷町／杉山定治〕
 出典〔日本常民文化研究所 1980: 60. 小坂 1980: 117.〕
 使用〔岐阜県郡上郡明方村寒水 本川正明〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治四十二年朧月吉日 郡上八幡赤谷町 本家製造人 杉山定治〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治43, 3. /1910〕 所蔵〔石川県立歴史博物館〕
 製造〔石川県 金沢市春日町／二木政太郎〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔石川県金沢市 紫岡浅司〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治四拾叁年参月上旬 河北郡花園村字二日市… 細工者 金沢市春日町 二木政太郎〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治44, 9. /1911〕 所蔵〔春日町歴史民俗資料館〕
 製造〔兵庫県 氷上郡石負村／山田文三郎〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 19.〕
 使用〔兵庫県氷上郡春日町〕
 特記〔 〕
 銘文〔明治四十四年亥九月吉日 大極上□唐箕□無類…山田文三郎（花押）（焼印）丹波氷上郡石負村さし文〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治44, 11. /1911〕 所蔵〔個人蔵〕
 製造〔 県 /萱野多門〕
 出典〔日本常民文化研究所 1980: 72.〕
 使用〔福井県三方郡実浜町新庄 高木伍一郎〕
 特記〔柴崎龍太郎の改造状況は中車位直し 年号は改造年〕
 銘文〔大極上稿輒萱野多門作之 明治四十四年十一月改造之 丹後国中郡静出津村 柴崎龍太郎〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治44, 11. /1911〕 所蔵〔飛騨民俗村〕
製造〔岐阜県 高山町川西/山下茂右ヱ門〕
出典〔日本常民文化研究所 1980: 57, 90. 小坂 1980: 117.〕
使用〔岐阜県高山市西七日町 山下稲三〕
特記〔 〕
銘文〔明治四十四年十一月 第壹百八拾八号 製造人高山町川西山下茂右ヱ門 新案特許第
98027 第39136 原田式片岡式 撰穀器加減器取銘改負 唐箕 岡山県後月郡木口子
驛西共有権利者片岡吾助〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治44, 11. /1911〕 所蔵〔福知山市文化史料館〕
製造〔兵庫県 出石内町/上田達造〕
出典〔近藤調査〕
使用〔京都府〕
特記〔上田修三の談話では、祖父が上田辰蔵〕
銘文〔明治四拾四第十一月吉日 出石内町 上田達造製〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔明治45, 1. /1912〕 所蔵〔東京農業大学図書館〕
製造〔香川県 前田村長淵/村尾秀次〕
出典〔小坂 1980: 117, 140, 146.〕
使用〔香川県大川郡寒川町石田西 大野八百吉〕
特記〔四国村所蔵資料に同人名昭和2年の唐箕あり、住所は「木田郡前田村」〕
銘文〔明治四十五年一月 大極上請合 前田村長淵 村尾秀次製 石田村 本家大野 明治
四十五年〕

紀年銘唐箕一覽Ⅲ その他（大正時代以降、無年号資料等）

本文中でとりあげた大正時代以降の唐箕あるいは無年号資料（とおしつき唐箕・半唐箕が主である）を以下に記す。

呼称〔唐 箕〕 年号〔大正14, 秋. /1925〕 所蔵〔春日町歴史民俗資料館〕
製造〔兵庫県 氷上郡生郷村横田/森川屋吉竹麻夫〕
出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 19.〕
使用〔兵庫県氷上郡春日町〕
特記〔 〕
銘文〔大正拾四年の秋新調之製□□ 氷上郡生郷村横田森川屋 大極上吉竹式改良唐箕燻米
風車無類請合□□生郷村森川屋吉竹麻夫（花押）〕

- 呼称〔唐 箕〕 年号〔昭和6, 秋. /1931〕 所蔵〔加美町資料館〕
 製造〔兵庫県 氷上郡生郷村／森川屋〕
 出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 16。〕
 使用〔兵庫県多可郡加美町山口 岸本義孝〕
 特記〔出向いて造ったもの, 平成元年現在使用中。藤村一男調査〕
 銘文〔昭和六年の秋新調…生郷村森川屋 三共式改良唐箕特製請合…氷上郡生郷村森川屋〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔大正2, 8. /1913〕 所蔵〔愛媛県立歴史民俗資料館〕
 製造〔愛媛県 郡中□町／豊嶋〕
 出典〔近藤調査〕
 使用〔愛媛県伊予郡松前町〕
 特記〔 〕
 銘文〔大正貳年八月製作 伊豫郡北伊豫村大字天溝 原田西之端 高市金次郎所持 大正貳年八月中旬製作 大工 郡中□町 豊嶋〕
- 呼称〔米麥撰別機〕年号〔大正2. /1913〕 所蔵〔(不明)〕
 製造〔香川県 大川郡造田村野間田／十河芳吉〕
 出典〔桂真幸教示〕
 使用〔香川県〕
 特記〔分離式とおしつき唐箕 年号は実用新案出願年・翌年登録第31958号〕
 銘文〔 〕
- 呼称〔半唐箕〕 年号〔大正5, 秋. /1916〕 所蔵〔会津民俗館〕
 製造〔福島県 会津北田村／北田平造〕
 出典〔佐々木 1980: 90, 103-105. 小坂 1980: 117-118, 141, 147。〕
 使用〔福島県耶麻郡猪苗代町峰屋敷〕
 特記〔 〕
 銘文〔大正五年□□秋求之 (焼印) 北田平造〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔昭和10, 6, 19./1935〕 所蔵〔川崎市立日本民家園〕
 製造〔 〕
 出典〔小坂 1980: 118-119, 142, 147。〕
 使用〔神奈川県川崎市高津区新作 青木政吉〕
 特記〔 〕
 銘文〔昭和拾年六月十九日〕
- 呼称〔唐 箕〕 年号〔昭和12, 10./1937〕 所蔵〔川崎市立日本民家園〕
 製造〔 〕
 出典〔小坂 1980: 119, 147。〕
 使用〔神奈川県川崎市多摩区登戸 小泉寛明〕
 特記〔 〕
 銘文〔昭和拾貳年拾月吉日 上原金助〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔— /—〕 所蔵〔尼崎市立文化財収蔵庫〕
製造〔大阪府 大坂西高津新道／杵屋松五郎〕
出典〔近藤 1984b: 3-4。森 1985: 14-18。〕
使用〔兵庫県尼崎市築地町 安川太一〕
特記〔とおしつき唐箕 地名から製作時期の下限は明治初期頃と判断される〕
銘文〔大坂西高津新道 杵屋松五郎 大坂西高津新道 木根屋松五郎 (焼印) □里〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔— /—〕 所蔵〔香寺民俗資料館〕
製造〔兵庫県 姫路市□□□元町／源助〕
出典〔近藤 1984a: 18-22。同 1984b: 1-2。〕
使用〔兵庫県姫路市飾東町〕
特記〔とおしつき唐箕〕
銘文〔大極上無類飛切請國別仕立 姫路市□□□元町大工源助造り〕

呼称〔トウミ〕 年号〔— /—〕 所蔵〔生野町〕
製造〔兵庫県 姫路市野里威徳寺町／源助〕
出典〔兵庫県立歴史博物館 1991: 18。〕
使用〔兵庫県朝来郡生野町〕
特記〔とおしつき唐箕〕
銘文〔大極上無類飛切請合千石姫路市野里威徳寺町大工源助是造〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔— /—〕 所蔵〔八尾市立歴史民俗資料館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋東詰／京屋太兵衛〕
出典〔立石 1991: 46, 53。〕
使用〔大阪府八尾市亀井 田中繁夫〕
特記〔とおしつき唐箕〕
銘文〔大坂農人橋東詰本家京屋太兵衛仕出□ 本家製造所 本家請合千石通シ 大坂本家農人□東詰本家京屋□□衛〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔— /—〕 所蔵〔個人蔵〕
製造〔大阪府 大坂農人橋二丁目／京屋七兵衛〕
出典〔近藤 1984b: 2-3。〕
使用〔大阪府大阪市東区備後町 池田萬助〕
特記〔とおしつき唐箕〕
銘文〔大阪農人橋… 大阪農人橋… (焼印) 大阪農人橋二丁目本家京屋七兵衛〕

呼称〔唐 箕〕 年号〔— /—〕 所蔵〔伊丹市立博物館〕
製造〔大阪府 大坂農人橋二丁目／京屋七兵衛〕
出典〔近藤 1987a: 12。〕
使用〔兵庫県伊丹市昆陽字宮田 城一次〕
特記〔とおしつき唐箕〕
銘文〔大坂農人橋二丁目京屋七… (焼印) 大坂農人橋二丁目本家京屋七兵衛製〕

呼称〔トウミ〕 年号〔— /—〕
 製造〔大阪府 大阪農人橋貳丁目／京屋七兵衛〕
 出典〔近藤 1987a: 11-12。〕
 使用〔大阪府東淀川区豊里〕
 特記〔とおしつき唐箕〕
 銘文〔大阪農人橋貳丁目 本家京屋七兵衛〕

所蔵〔豊里郷土資料館〕

呼称〔トウミ〕 年号〔— /—〕
 製造〔兵庫県 出石郡出石町／上田達〕
 出典〔近藤 1987a: 12-13。〕
 使用〔兵庫県出石郡但東町 橋本重幸〕
 特記〔とおしつき唐箕〕
 銘文〔上田達〕

所蔵〔赤花民俗資料館〕

呼称〔トウミ〕 年号〔— /—〕
 製造〔 〕
 出典〔桂真幸教示〕
 使用〔 県 (四国)〕
 特記〔とおしつき唐箕〕
 銘文〔昭和□拾□年〕

所蔵〔(不明)〕

呼称〔唐箕〕 年号〔— /—〕
 製造〔福島県〕
 出典〔佐々木 1983a: 14-15。〕
 使用〔福島県南会津郡南郷村〕
 特記〔半唐箕・樋1口、江戸時代のものという〕
 銘文〔 〕

所蔵〔南郷村歴史民俗資料館〕

呼称〔半唐箕〕 年号〔— /—〕
 製造〔 〕
 出典〔三輪 1989: 141-142。〕
 使用〔山形県西置賜郡飯豊町〕
 特記〔江戸末期の製作か〕
 銘文〔吟味請合 (焼印) ㊦〕

所蔵〔同志社大学伝統技術史料室〕

文 献

福田栄治

1978 『京都府の民具』Ⅱ, 京都府立総合資料館。

兵庫県立歴史博物館

1991 『兵庫県立歴史博物館普及資料9 兵庫の農具 とうみ・まんごく』。

古島敏雄

1974 「近世日本農業の構造」『古島敏雄著作集』3, 東京大学出版会。

近藤 紀年銘唐箕の形態分類

泉 房子

1980 『民具再見』 鈺脈社。

神田三亀男

1990 『聞き書き 民具製作職人話』 『民具マンスリー』 22(5): 1-10。

木下 忠

1990 「設楽の民具学的研究」 木下忠編 『山村民俗の物質文化的研究』 pp. 3-7。

近藤雅樹

1984a 「播磨型半唐箕」 『民具マンスリー』 17(1): 17-23。

1984b 「とおしを有する半唐箕」 『民具研究』 50: 1-4。

1984c 「二塚の唐箕」 『近畿民具』 8: 1-12。

1987a 「とおしを有する半唐箕」 『民具研究』 70: 11-14。

1987b 「天明元年銘を有する万石通し 付・江戸時代の年号墨書を有する万石・千石一覽」 『近畿民具』 11: 45-51。

1988 「唐箕・万石製造」 兵庫県教育委員会編 『兵庫県民俗調査報告11 兵庫県の諸職』 pp. 135-138。

1989 「文化五年銘唐箕」 『地域研究いたみ』 18: 69-76。

小谷方明

1981 「西日本の唐箕の特色」 『日本常民文化研究所調査報告 第8集 紀年銘民具・農具調査等』 pp. 1-9。

1982 『大阪の民具・民俗志』 文化出版局。

小山友孝

1981 「近世の紀年銘農具をめぐって」 『群馬県立歴史博物館紀要』 2: 111-123。

熊本日日新聞社編集部

1977 『農魂 熊本の農具』 熊本日日新聞社。

町田市立博物館

1991 『多摩の民具—江戸時代の農具—』。

峯村 敏

1990 「民具実測図録」 木下忠編 『山村民俗の物質文化的研究』 pp. 47-107。

宮本常一

1979 『民具学の提唱』 未来社。

三輪茂雄

1989 『籐』 法政大学出版局。

森 隆男

1985 「尼崎市教育委員会所蔵『とおしを有する半唐箕』」 尼崎市教育委員会編 『尼崎の農具』 pp. 14-18。

守山市史編纂委員会

1974 『守山市史』 上巻。

名古屋市博物館

1982 『名古屋市博物館館蔵品目録』 5。

日本常民文化研究所

1980 『日本常民文化研究所調査報告 第5集 紀年銘（年号のある）民具目録・図録—東日本—』。

1981 『日本常民文化研究所調査報告 第7集 紀年銘（年号のある）民具目録・図録—西日本—』。

日本民俗資料館・松本市立博物館

1984 『資料目録1（民俗編その1・指定文化財）』。

野口一雄

1986 「紀年銘を有する唐箕」 『山形県立博物館ニュース』 88: 5。

大島暁雄

1983 「上総唐箕—伝播と展開—」 『えとのす』 22: 147-159。

小坂広志

1978a 「紀年民具紹介—川崎市立日本民家園の例—」 『物質文化』 29: 64-77。

1978b 「紀年銘を有する民具—唐箕について—」 『日本民具学会通信』 16: 1-4。

- 1980 「紀年銘を有する唐箕について—東日本を中心に—」『日本常民文化研究所調査報告 第6集 紀年銘民具・農具調査』pp. 107-147。
- 1982 「畿内の唐箕と伝播」『近畿地方の民具』明玄書房, pp. 42-70。
- 1986 「唐箕の伝来と普及」『日本民俗文化大系 14 技術と民俗 (下) 都市・町・村の生活技術誌』小学館, pp. 185-187。
- 佐々木長生
- 1979 「会津地方における脱穀・調整用具—紀年銘民具に関する調査から—」『民具マンスリー』12(5): 1-16。
- 1980 「会津地方における脱穀・調整用具」『日本常民文化研究所調査報告 第6集 紀年銘民具・農具調査』pp. 79-107。
- 1981 「会津地方における近世農具—絵画・文献資料を中心に—」『日本常民文化研究所調査報告 第8集 紀年銘民具・農具調査等』pp. 65-107。
- 1985a 「調整・選別用具の発達過程 (一)」『民具マンスリー』18(3): 1-11。
- 1985b 「調整・選別用具の発達過程 (二)」『民具マンスリー』18(8): 4-12。
- 1986 「調整・選別用具の発達過程 (三)」『民具マンスリー』19(2): 11-22。
- 1989 「奥会津地方の紀年銘農具—奥会津地方歴史民俗資料館の資料を中心に—」『民具研究』82: 1-10。
- 塩見嘉久・大塚活美
- 1989 「京都府立総合資料館所蔵の在銘農具」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』2: 95-109。
- 立石則也
- 1991 「民具研究と紀年銘民具—八尾市歴史民俗資料館所蔵の農具を中心として—」『八尾市歴史民俗資料館研究紀要』2: 41-54。
- 鶴藤鹿忠
- 1978 『岡山の民具』日本文教出版。
- 徳山村教育委員会
- 1987a 『徳山の山村生産用具—概説・目録編—』。
- 1987b 『徳山の山村生産用具—実測図編—』。
- 牛島盛光
- 1981 『熊本の民具』熊本日々新聞社。
- 和田邦平
- 1974 「郷土の民具 唐箕」兵庫県広報課編『ニューひょうご』87: 27。
- 芳井敬郎
- 1981 「農具商についての民具論的考察—特に大阪を中心として—」『日本常民文化研究所調査報告 第8集 紀年銘民具・農具調査等』pp. 11-21。